

# ことばの 学び

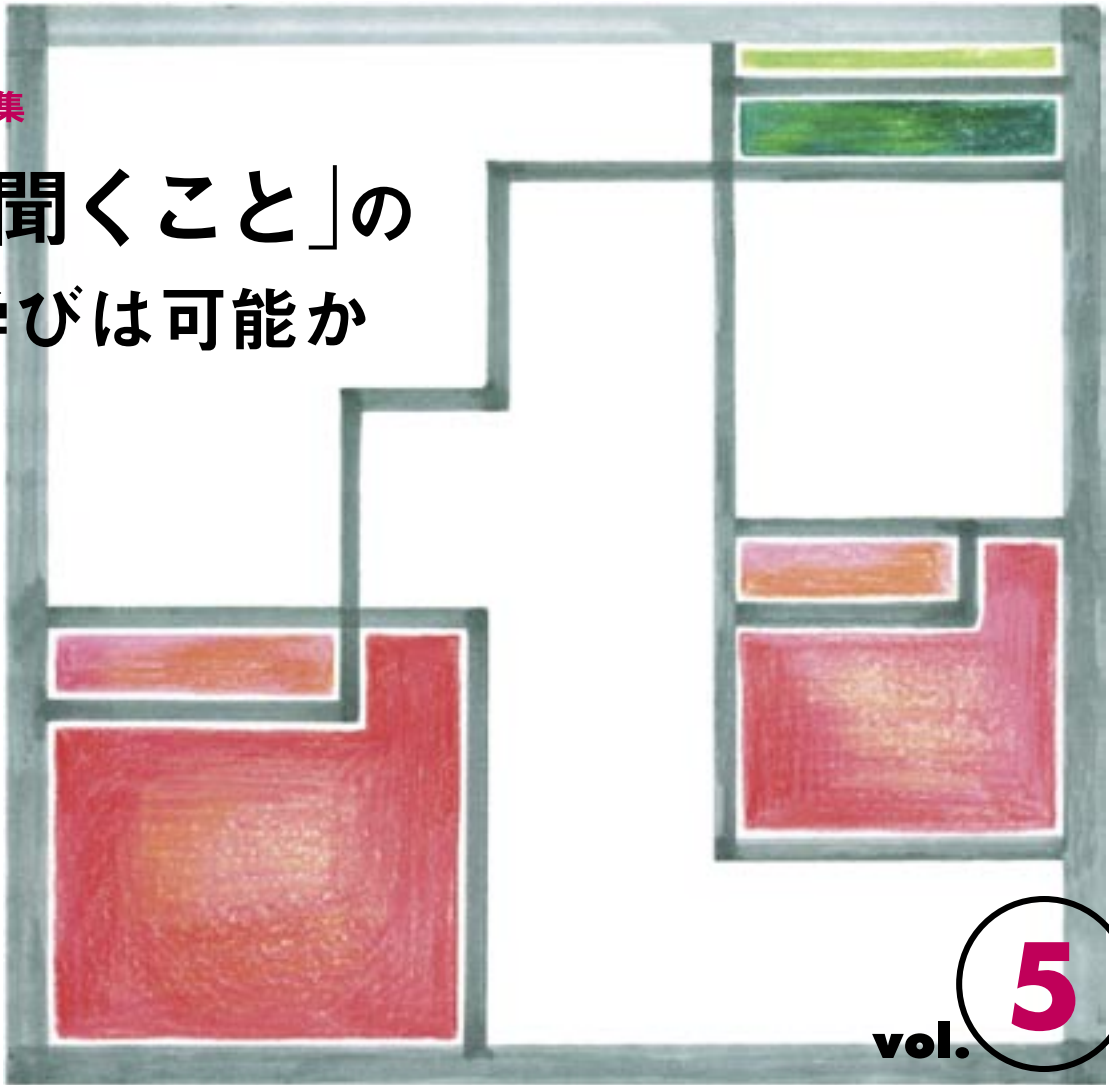
三省堂 国語教育

a new way  
of learning  
Japanese



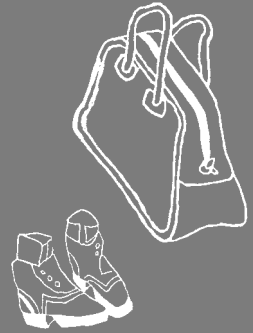
特集

「聞くこと」の  
学びは可能か



vol. **5**

# 2004年 夏の国語教育セミナー 概要が決定しました!



夏の「国語教育セミナー」の概要が下記のとおり決まりました。  
毎年、好評のセミナーです。参加のお申し込みはお早めどうぞ。  
4月下旬までには、小社ホームページでも申込受付を開始する予定です。

## 第2回

### 国語教育セミナー〈大阪〉

主催：言語教育文化研究所

- 日程 2004年7月29日(木)
- 会場 アウィーナ大阪(上本町)
- 定員 150名
- ワークショップ
  - 1 読書のアニメーション(仮題)  
岩辺泰史(いわなべ・たいじ)  
前葛飾区立飯塚小学校
  - 2 話す・聞くについて(仮題)  
有働玲子(うどう・れいこ) 聖徳大学
  - 3 教科書学習材を「読む」(仮題)  
西橋正泰(にしはし・まさひろ)  
元NHKアナウンサー
  - 4 国語科書写について(仮題)  
松本仁志(まつもと・ひとし)  
広島大学
- 講演 重松 清(しげまつ・きよし)さん 作家

## 第1回

### 国語教育セミナー〈福岡〉

主催：言語教育文化研究所

- 日程 2004年8月19日(木)
- 会場 アクロス福岡(天神)
- 定員 75名
- ワークショップ
  - 1 書くことについて(仮題)  
尾木和英(おぎ・かずあき)  
言語教育文化研究所
  - 2 パネルディスカッション(仮題)  
花田修一(はなだ・しゅういち)  
言語教育文化研究所
- 講演 米川 千嘉子(よねかわ・ちかこ)さん 歌人

## 第7回

### 国語教育セミナー

主催：教育文化研究会

- 日程 2004年8月20日(金)
- 会場 三省堂文化会館(新宿)
- 定員 300名
- ワークショップ
  - 1 話す・聞くについて(仮題)  
有働玲子(うどう・れいこ) 聖徳大学
  - 2 読書活動について(仮題)  
高桑弥須子(たかくわ・やすこ)  
市川市立稲越小学校
  - 3 メディア・リテラシー(仮題)  
中村敦雄(なかむら・あつお) 群馬大学
  - 4 コラボレーションで書く(仮題)  
牧戸章(まきど・あきら) 滋賀大学
  - 5 読むことについて(仮題)  
町田守弘(まちだ・もりひろ) 早稲田大学
  - 6 国語科書写について(仮題)  
松本仁志(まつもと・ひとし) 広島大学
- 講演 平田オリザさん 劇作家・演出家

## 第2回

### 小学校国語教育セミナー

主催：言語教育文化研究所

- 日程 2004年8月21日(土)
- 会場 三省堂文化会館(新宿)
- 定員 300名
- ワークショップ
  - 1 読書活動について(仮題)  
高桑弥須子(たかくわ・やすこ)  
市川市立稲越小学校
  - 2 音声言語について(仮題)  
高橋俊三(たかはし・しゅんぞう)  
前群馬大学
  - 3 句会ライブ(仮題)  
夏井いつき(なつい・いつき) 俳人
  - 4 対話について(仮題)  
堀切和雅(ほりきり・かずまさ)  
青山学院女子短期大学
  - 5 聞くことについて(仮題)  
牧戸章(まきど・あきら) 滋賀大学
  - 6 読むことの授業づくり(仮題)  
宮川健郎(みやかわ・たけお)  
明星大学
- 講演 清水 真砂子(しみず まさこ)さん  
児童文学翻訳家・作家

# ことばの 学び

三省堂 国語教育  
a new way  
of learning  
Japanese

vol. **5**  
CONTENTS

+表紙イラスト  
藤本理矢  
+表紙デザイン  
石川愛子  
+本文デザイン・DTP制作  
田頭ひろみ

## ●特集

# 「聞くこと」の学びは可能か

エッセイ 聞き手の意識下に届く言葉 覚 和歌子	2
「聞くこと」の学びは〈どのように〉可能か 三浦 和尚	4
「聞くこと」の授業構想 町田 守弘	6
「きく」力を育てるカリキュラムを 「きく」学びが確かに行われる教室をつくる 三浦 修一	10
実践アイデア1 小学校 大木 圭	14
実践アイデア2 中学校① 佐藤 佐敏	15
実践アイデア3 中学校② 宮本 由里子	16
実践アイデア4 高等学校 富谷 利光	17

## ●学びの部屋から

〈書く〉

「書く」ことのテスト問題 —どんな学力を見るのか— 小田 和也	18
------------------------------------	----

〈読む〉

メディアからの情報を活用した授業 テレビと新聞を活用して発信者の意図に迫る 今井 靖	20
--	----

〈評価〉(個に応じた指導)

「個人記録簿」の作成と活用 玉城 栄子	22
------------------------	----

〈書写〉

国語教科書と関連づけた書写学習の取り組み 日高 辰人	24
-------------------------------	----

## ●ことばにせまる

「語り手」の概念の導入 宮川 健郎	26
----------------------	----

## ●キーワードで読む国語教育

「人間力の育成」「思考力の育成」「聞くことの指導」 尾木 和英	30
------------------------------------	----

## ●いま、小学校では

多様な読みを引き出し「伝え合う力」を高める文学教材の授業 吉井 美香	32
---------------------------------------	----

## ●新しい視点で

アメリカの言語教育における二つの方向性と読書指導の実際 足立 幸子	34
--------------------------------------	----

## ●本の紹介

辻本雅史『「学び」の復権 —模倣と習熟』 糸井 通浩	37
-------------------------------	----

言語教育文化研究所からのお知らせ	38
------------------	----

編集後記	40
------	----

特集

「聞くこと」の学びは可能か

「聞くこと」の重要性、その学びの必要であることについては、だれしもが強い共感を示すに違いない。しかし、「聞くこと」の学びをどう構想し、展開するかについては、まさに直面する課題にとどまっている。

本号では、その学びの可能性を探り、同時に具体的な実践への一つの提言となることを意図し、あえてこの特集題を掲げることとした。

エッセイ

聞き手の  
意識下に届く  
言葉

覚和歌子

〔かく わかこ〕詩作朗読人 音楽家。二〇〇四年一月に初エッセイ集「青天白日」（晶文社）を出版。今年夏には二十年間続いているポータル活動の集大成としてアルバムCD「セララ」をリリース。

三

十歳を過ぎたころだったろうか。ある出来事をきっかけに、それまでどれだけ自分のことしか考えずに生きてきたかということに気づかされ、世の中のためにどんな役に立てるか、という問いを生まれて初めてつきつめて考えたのは。

このとき私にできることは、詩のよきなものを書くことと、それを声に出して読むことぐらいしかなく、その時点ではまだ拙いそれらで「世の中の役に立とう」とは我ながら片腹痛かった

が、そこから始めるしかない自分なのだど覚悟を決めたことも確かである。

つまり私の「聞いてもらうための表現」の試行錯誤は、「世の役に立つものになるためには」というもってまわった発想から始まっている。

さて、目で読むのと、声に出して読むのと、音読してもらう声に耳をすますのでは、言葉の持つたましい言葉の伝わり方にたいへんなちがいがあるといえる。はい、うまい。

子どもの頃、夜眠る前に母親に本を

読んでもらった経験のある幸福な人は、耳をすませて聞く言葉から、どれだけ豊かに想像の世界が広がるか、長じてそれがどれだけ心の財産となるか説明するまでもなく知っている。

王子さまとお姫さまの恋物語や地底何百マイルの冒険譚が心をふるわせるように、それを読む声の響きは、聞き手の鼓膜の細胞だけでなく、身体細胞全体にしみわたり、揺さぶりをかけてくるものではなかったろうか。

詩を書いて朗読するという舞台表現を十年やってきて得たのは、聞くということが受動的でありながらたいへんに身体的な行為であるという実感である。

身体をリラックスさせたときに耳から吸い込まれる言葉の響きは、意味ではなく振動（バイブレーション）として細胞の一つ一つにはたらきかけるからを持っている。

言いかえれば、テキストの意味内容もさることながら、語り手の声の振動そのものが、観客に対して「メッセージとして」機能してしまうということ

だ。

これは読み手の体調や精神状態、もつといえは生き方が、声の響きにあらわになるということと同義で、さらに興味深いのはそれが受け手の「意識下」にキヤッチされるということだろうか。うまくいった場合、受け手は意味はわからないけれど（つまり意識の上では何が起こっているかわからないけれど）何だかいい、なぜだかちからが湧いてくる、肩凝りが取れている（笑）など、そんな関係が読み手との間に生まれてくる。（音楽療法も、この「振動が身体にもたらす影響力」によるのだと思われる。）またこれは逆に言えば、テキストにどんなにすばらしい意味がひそんでいても、読み手のありかたとその読み方によって、内容はいくらでも翻訳されて伝わってしまうことだ。こんなにおもしろくて恐ろしいことはない。そしてこの事実には、「読んで聞かせる表現」が世の中を変える可能性を見るのは、私だけではないと思う。

若い人の言葉が乱れていて、ポキヤブラリーも貧しい、という会話はよく

耳にするが、そう言い合う大人たちが自分の言葉の響きに意識的であるかどうかは疑わしい。子どもたちの言葉の貧しさは心の貧しさかもしれないが、同時に大人の言葉のありかたの反映である。心が動く言葉の調べを聞く機会がなければ、それを理解しようとする耳ができてこない。

つまり、若い聞き手の意識のあり方を刺激できる言葉というのは、単純にきれいな言葉づかいをこころがけるにとどまらない。いうまでもなく言葉は心とふるまい（身体）の三位一体をもって初めて言葉としてたましいを宿すのであるから、実感と経験のともなわない言葉は胸の深みに響くことなく、むなしく宙をさまようばかりなのである。

「読んで聞かせる表現」者としての私は、常に受け手に生き方をさらしている、自他にとって危険な仕事人であるということも肝に銘じていなければならぬが、それでいい世の中の役に立っているかどうかは、別の話である。

遅まきながら最近読んだ『0歳児がこ  
とばを獲得するとき』（正高信男、中公  
新書、一九九三）によれば、人間は胎児  
のうちから耳が聞こえ、生まれてすぐに  
母親の声を聞き分けるといふ。また、母  
親の呼びかけに応じて、同じような発声  
をしようとする行為は、一種のコミュニ  
ケーション意識であろうが、それは生後  
十二〜十四週間ごろから明確に現れると  
いふ。

人間は決して白紙で生まれてくるので  
はなく、生まれた時からある程度のコミ  
ュニケーション能力を有しているとい  
うのである。

さて、聞くことに限定していえば、人  
間は生まれる前から聞くことを「訓練」  
しており、そのことによって言語を獲得  
していくのだと考えられる。「聞く力」「聞  
き取る力」を「聞くことの学習」と考え  
れば、まちがいでなく人間は「聞くこと  
の学び」を続けている。

そういう意味で、聞くことの学びは可  
能である。事実人間は、学んで育ってき  
たのである。

ただ、問題は、「聞くことの学びは可  
能か」ではなく、学校教育における意識  
的系統的学習として「聞くことの学びは  
〈どのように〉可能か」ではないか。

特集

「聞くこと」の学びは可能か

# 「聞くこと」の学びは 〈どのように〉可能か

三浦 和尚

愛媛大学

考えてみれば、「読む・書く・聞く・  
話す」という行為の中で、調整ができな  
いのは「聞く」だけである。

途中で立ち止まって考える、書き直す、  
話す速さを変えるなど、「読む・書く・  
話す」については、自分で調整できる部  
分がある。調整できるからこそ、例えば  
「読む」において、立ち止まって人物関  
係を整理する、結論に対する理由を考え  
る、根拠の確かさを検証するなどの読み  
の工夫（言語技能と言ってもよい）が可  
能になる。

学校教育では、例えばそういう読みの  
工夫を身につけさせることを「読む力を  
つける」と言ってきた。それは、調整で  
きる言語活動だから可能であるのであ  
り、「書く・話す」についても大なり小  
なり同様である。

しかし「聞く」についてはどうであ  
るか。例えば、音量や速さをこちらが調  
節することはできない。あるいは、聞き  
直すことは、相手によっては可能だけ  
れども、日常的にいつも繰り返してき  
るわけではない。

そのように考えれば、「聞くことの学  
び」を「読む・書く・話すことの学び」  
と同じものだと考えること自体に無理が

あるのではないか。

私は「聞くことの学び」は、次の二つの方向で意識的に行われるべきだと考える。

一つは、態度や意識の育成である。

例えば人間は、「言った、言わない」のトラブルが生じた時、たいてい「相手がきちんと話さないからいけない」と考える。「自分にきちんと聞く力がない」とはあまり考えない。しかし、後者の場合があることは容易に想像できるであろう。

きちんと聞く力が不足しているかもしれない、きちんと聞かなければならないという意識をもつことは、聞くことを意識的に行ううえで、きわめて重要な態度である。そのことを抜きに聞く力の育成は図ることができない。そういう態度の育成に（どのように）アプローチできるかが問われている。

もう一つは、「技能の行動目標化」である。

例えば「話し手の意図を考えながら聞く」といつても、極論すれば「話し手の意図を考えながら聞きましょう」と言うしかないのが実情であろう。具体的に何をどうすればいいのかわからず、学習者

はたまったものではない。聞くことの学びにはそういう側面がある。

そうではなく、具体的な行動として、「わからないことは聞き直す」「うなずきながら聞く」「メモをとる」「質問をする」などの行動を設定し、その行動ができるようにする学習を進めるのである。このような行動をどのくらい示すことができるか、またそれを身につけさせるために（どのように）学ばせるかは、次の課題である。

聞くことの学びにおいては、従来、「話す速さは適当でしたか」といったことを聞き手に確認するようなことが行われていないではなかった。それは、「話すことの技能の確認」であり、聞く力を育てる問いかけではない。本来の意味での聞く学びの成立へ向けて、具体的な学習材が求められる。

「みうら かずなお」愛媛大学教授。近著に「話す・聞くの実践学」「読む」こととの再構築」（ともに三省堂）。昨年四月から附属小学校校長となり、子どもたちとのふれ合いを楽しんでいる。しかし、発達差のある子どもたちへの話は難しい。

特集  
「聞くこと」の  
学びは可能か

# 「聞くこと」の

## 授業構想

町田守弘

早稲田大学

### 1 「聞くこと」の基盤としての聴覚

第一三〇回（二〇〇三年度下半期）芥川賞を受賞した綿矢りさの『蹴りたい背中』は、「さびしさは鳴る」というセンテンスで始まる。「さびしさ」という感情が、ここでは「鳴る」という聴覚に関わる感覚によって把握されている。その音の実態は、続けて「耳が痛くなるほど高く澄んだ鈴の音」として表現される。高校生である主人公は、プリントを細長く千切る音によって、「孤独の音」を消そうとした。聴覚の話題から始まる『蹴りたい背中』には、その他にも様々な感覚が描かれている。

現代社会は「見ること」に多くを依存している。コンピュータの急速な普及によって、

私たちの周囲には多様な映像情報が溢れている。携帯電話も「話す」ためのツールから、メールを中心とした「見る」ツールへと確実に変容を遂げた。現代人は多くの場面で、視覚的なイメージに寄りかかって生きている。視覚のみが先行し、五感がバランスを欠くことから派生する問題は深刻である。ちなみに『蹴りたい背中』と同時に芥川賞を受賞した金原ひとみの『蛇にピアス』には、「スプリットタン」の若者が登場する。このような「身体改造」という行為は、皮膚を傷つけることによって生ずる痛みの感覚から、自身の存在を確認するものとしてとらえることができるのではないか。そこには聴覚の衰退に関わる問題が潜んでいる。

現代社会に生きる子どもの学びを考える際に、五感全体のバランスをいかに取り戻すかという問題を避けて通ることはできない。ことばの学びにおいては、特に「聞くこと」の領域が深く五感に関わるものである。そこで本稿では聴覚に着目し、国語科で「聞くこと」をどのように扱うかという問題を、具体的な授業構想を通して考えることにする。

### 2 学習指導要領における「聞くこと」

まず、学習指導要領で「聞くこと」がどのように位置づけられているのかを確認してみ

たい。周知のように、学習指導要領における国語科の領域が、「表現」「理解」から「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」になった。現行の学習指導要領では、「伝え合う力」を高めることが目標に組み込まれ、「聞くこと」は「話すこと」と一体化した活動として位置づけられている。高等学校の必修教科目を例にすると、従前の「国語Ⅰ」では特に時間数が示されなかった音声言語に関する領域が、「国語総合」では一五単位時間程度を配当するように求められるようになった。さらに「言語活動例」が示されたことによって、授業における具体的な学習内容が明確になった。「国語総合」では、「スピーチや説明」「報告や発表」「話し合いや討論」などの言語活動を行うように規定されている。

このように、学習指導要領の領域構成に「話すこと・聞くこと」が組み込まれ、さらに領域ごとに言語活動例が示されたことによって、教科書や授業の内容にいくつかの影響が生ずることになる。これまではあまり明確に意識することなく、学習の自然な展開に即して指導を展開してきた「話すこと・聞くこと」について、今後は意識的に授業の中に位置づける必要がある。

「聞くこと」の学びは独立した活動として扱うよりも、「話すこと」と一体化した活動として扱う方が効果的である。そして「聞くこ



と」の学びには、大きく二つの方向がある。その一つは日常の学習活動の中に自然に組み込むという方向であり、いま一つは、「聞くこと」の活動を展開するための学びを取り立てて扱うという方向である。この二つを、バランスよく授業の中で取り上げられるように配慮する必要がある。

### 3 音の表現探索

「聞くこと」の学びを構想する際に、聴覚に関わる表現に着目することから出発してみたい。冒頭に引用した『蹴りたい背中』のような文学作品を読んで、聴覚に関わる表現を抜き出し、それが何を表現したのか、そしてその効果はどのようなものかという問題について検討を加える。音の表現に着目して、聴覚に子どもたちの関心を向けることは、「聞くこと」の新たな学びの可能性を開くことになるだろう。

擬音語・擬態語に注目する学びを工夫する必要もある。たとえば水道の蛇口から水が出るという情景について、水の出る分量や速度に応じてさまざまな擬音語を当てはめる。「ポタポタ」から「ザーザー」にいたる多様な擬音語・擬態語を教室で交流し、語感を豊かにするという授業が考えられる。さらに図書館で『擬音・擬態語辞典』など関連する文献を

調べて、水が出るときの音がどのように表現されているのかを調査する。その他にも、雨の降る音、風の吹く音など、具体的な音のある場面を設定して、さまざまな擬音語・擬態語を当てはめてみる。それぞれのことばによって表現される情景について、グループで話し合う。

身近な場所から、音に関する擬音語・擬態語を収集して、そのことばによって表現される音を想像するのも効果的である。カードに採取年月日を記入し、一枚一項目という原則にのっとり、さまざまな擬音語・擬態語を採録する。そのことばと、それが用いられていた前後の表現、および出典を必ず記入するように徹底する。カードのストックが増えたところで、今度はグループ内で情報交換をして、身近な場所にある音がどのようなことばによって表現されているのかを明らかにしてゆく。

このようにして、聴覚に関わることばの学びを授業の中に取り入れることで、子どもたちの音への関心を喚起することが可能となる。また聴覚の鍛錬にもつながって、「聞くこと」の基盤作りにも有効となる。授業時間という枠組みを超えた自主的な学びの場も含めて、音の表現を探索するという活動を取り入れてみたい。

### 4 テレビのテロップを考える

教育の分野でメディア・リテラシーの問題が多様な切り口から論じられ、話題になっている。めまぐるしく進展するメディアとどのようにつきあうのかということは、教育の重要な課題である。冒頭で言及したように、現代社会では「見ること」に関わるメディアが主流になりつつある。特に、テレビとインターネットの意味は大きい。「見ること」はまた「聞くこと」の領域すらも侵食しつつある。その一つの具体例として、テレビ番組におけるテロップ（スーパー）の異常なまでの普及という事実を挙げることができる。

ニュースバラエティ番組をはじめ多くのテレビ番組において、人物の話すことばにかなりの頻度でテロップが入る。中には漫画の吹き出しのように、字体から文字の色や大きさに至るまで、周到的配慮がなされているものもある。テロップが話の内容を視覚的に提示してくれるので、私たちは人物の話に注意して聞くという努力を怠るようになってしまった。テロップの文字情報が話よりも先行することもあるため、まだ話の途中であるにもかかわらず、その人のメッセージをいち早く知ることができる。ご丁寧に、指示語などにはカッコを付して指示する対象が明らかにされる。いまは、むしろテロップのない談話に違

和感を覚えるようになってしまった。

ただしここで注意しなければならないのは、はたしてテロップの文字情報は正確に人物の話を伝えているのかという問題である。ある知事の談話が事実とは反対のテロップを付して放映されたことから、番組を作成したテレビ局が糾弾されたことは記憶に新しい。ある政党の党首の談話が内容とは異なるテロップで放映されたこともある。限られた時間の中でテロップを作成しなければならぬという局側の事情は推察できるが、文字情報に依拠することなく、登場人物が発信することばに耳を傾けるといふ習慣を日ごろから身に付けるようにしたい。

テレビ番組のテロップも、工夫次第ではことばの学びのための学習材として使用することができる。具体的な授業構想は、次のようなものになる。なお、この構想は中学生・高校生へのいずれの学年にも応用が可能である。

①テロップが入るニュース番組をビデオに収録する。

実際にいくつかのニュース番組を録画して、そのストックの中から生徒たちの興味・関心に即した話題の番組を選択して、学習材とする。

②ニュースの背景について簡単な説明をする。

まず授業で紹介するニュースについて、どのような話題が取り上げられているのかを簡単に紹介する。それから、どのような人物が登場するのかを確認し、その人物の台詞に注意するように促す。

③映像を消して音だけをじっくりと聞かせる。

人物の表情を紹介し、その人物の話に耳を傾ける。このとき、映像は写さずに、音声のみを放送する。学習者は、話の要点やキーワードをメモしながら聞く。

④聞いたことを文章にまとめて、テロップの原稿を書く。

メモを参照しながら、テロップの原稿を作成する。

⑤実際のニュースの映像を改めて紹介し、番組側で作ったテロップを見て、自分の考えた案との比較・検討をする。

最後に再度ニュース番組を放映するが、今度はテロップがついた映像とともに紹介し、生徒たちが実際に作成したテロップとの比較・検討をすることになる。特によく聞き取れなかった会話があれば、その箇所には十分に注意をして、テロップが人物の談話を正しく表現しているかどうかを検証する。

授業の時間に余裕があれば、この後にテレビにおけるテロップの効果と問題点について

考えるという内容の学びを加えることができる。すべての活動において生徒たちの意識をことばに向け、ことばの働きを常に考慮するような学びのあり方が求められている。

## 5 対話・インタビューのワークショップ

前の節では、テレビというメディアを通して人の話を「聞くこと」の学びを構想した。もちろん国語科では、直接人の話を聞くという活動の場所を設ける必要がある。授業では意識的に「聞くこと」の場面を設定するように配慮したい。

「聞くこと」の表記を「聴くこと」「訊くこと」のように区別して、それぞれの内容を把握することがよく行われている。前の節では「聞くこと」および「聴くこと」に関わる授業構想を紹介したので、本節では「訊くこと」に関わる活動を取り上げる。具体的には、対話とインタビューの要素を組み込んだ構想である。この授業では、コミュニケーション能力の向上をも目指すことになる。具体的な活動としては「対話」と「インタビュー」の要素を取り入れつつ、ワークショップの形態で展開し、ゲームの要素を取り入れた楽しい内容にする。以下に実際の指導過程の概要を紹介する。

①クラス全体を二人ずつのグループに分ける。

席の近くの者でペアを組む。奇数のグループが生じた場合に、教師が加わるなどして調整する。

②二人のうち一人が質問者に、もう一人が回答者になる。

一回実施したら二人の立場を入れ替えることを、あらかじめ告げる。

③回答者は、ある有名な人物を一人選んで、その人の名前をノートに書く。

必ず相手もその人物のことを知っていることが条件となる。ノートに書くのは、回答者が途中で人物を変えることがないようにするためである。

④時間を二分間に区切って、質問者は様々な質問を投げかけ、回答者は誠意をもってそれに答える。

双方が協力して、効果的な質問と回答が成立するように努力する。

⑤時間になったら、質問者は回答者が連想した人物名を明らかにする。今度は立場を入れ替えて、同様に実施する。

質問者が答えてから、回答者はノートを相手に見せるようにする。

⑥終了後に実際の体験を通して、どのような質問が回答を導き出すのに効果的かを考

える。

立場を交換してそれぞれ実施してからの、どのような質問をすると回答がわかりやすいかを考えて、意見交換を実施する。

以上のようなワークシヨップを通して、「聞くこと」の学びが成立する。コミュニケーションに関わる「聞くこと」を、ゲームの要素を含めた授業によって展開することができる。

なお「聞くこと」の学びの振り返りとしては、活動が日常的に行われるものであるだけに、特に日常の学びと一体化したものが求められる。そして「聞くこと」の学びでは、活動を経験すること自体に意味があることが多い。国語の学力に直結することこだわって、安易に技能主義に陥らないようにしたい。例えば、対話・インタビュアの学習をする際に特に留意したいことをあらかじめ生徒に挙げさせるなどして、学習の意識化を図る必要がある。生徒に直接声をかけたり小まめに評価を書いたりして、子どもの学びの意欲を喚起するような配慮が重要である。

## 6 総括と課題

「聞くこと」の学びに関わる授業構想を三例紹介したが、いままでもなくこれはほんの一例である。現場ではさまざまな工夫が積み重

ねられ、研究も深められている。優れた研究と実践に学びつつ、変容する学習者の現実を的確にとらえたうえで、効果的な授業を構想する努力を続けたい。

まず活動の基盤となる聴覚に着目して、聴覚に関わることばの学びを構想する。五感が衰退しつづめるといふ現状の中で、感覚を磨くことは重要である。子どもたちを取り巻くメディアの環境にも目を向けて、たとえば映像を学習材とした「聞くこと」の学びを展開する必要もある。現在話題になっているメディア・リテラシーにも関連させた授業を構想することもできる。

学習指導要領の領域構成では「話すこと・聞くこと」として示されているように、「聞くこと」の学びは「話すこと」と一体化して進めることも必要である。また言語活動例に示されたような具体的な活動を通して、学びを展開するようにしたい。その際コミュニケーション能力の育成とからめて、対話やインタビュアのような活動を積極的に取り入れた構想が求められる。効果的な振り返りのあり方を模索することが、今後の課題である。

〔まぢだ もりひろ〕早稲田大学教育学部教授。興味・関心と意欲の喚起がことばの学びの原動力になると考え、楽しく力のつく授業開発についての研究を続けている。著書に「国語科授業構想の展開」(三省堂)など。

# 「きく」力を育てるカリキュラムを 「きく」学びが確かに行われる教室をつくる

三浦 修一

横浜市立原中学校

## 1 「きく」学びを組織する

国語科の学習は、「きく」ことから始まります。国語科教育に携わる先生方にとっては今さらと思えることです。

だからこそ、改めて確かめてみたいのです。「きく」とは、どういうことでしょうか。何をもちつて「きく」ことができたか評価できるのでしょう？

ここまで、「きく」と表記してきました。次のように使い分けることがあります。

「聞く」音や声を耳で感じる。話を耳から入れて理解する。

「聴く」自分の方から積極的に耳を傾ける。

「訊く」相手に何かをたずねる。

〔例解国語辞典第六版〕三省堂

国語科の授業で育てたい言語能力としての「きく」力というとき、どの漢字が想定されるのでしょうか？

「きく」力を育てる必要性は多くの人が認めているし、話題にもされますが、その具体となると焦点が定まらないことがあるのは、このあたりに原因があるように考えています。

そこで、提案です。

まず「聞く」力を確かに身につけさせるための学習を準備しましょう。そのうえで「聴く」意識を育て、「訊く」力へと高まるように、カリキュラムを作りましょう。

カリキュラムを作成する具体的な手順については多くの意見・立場がありますが、私は次のように考えています。※1

作成にあたって気をつけたいことは、教科書の学習材を基本に年間指導計画を作る前の、いくつかの手順です。

まず、学習する生徒たちがどの程度の「きく」力を身につけているか、明らかにする必要があります。次に教科書にある学習材を学ばせることによりその学年で求められる「話す・聞く」力が身につくかどうかという見通しをもつことです。

それぞれの学習材にふさわしい言語活動を行うように準備すること、その言語活動を行うことを通して学習者である生徒が目指す目標を示すこと、ここまですがカリキュラム作成の事前の準備です。

その過程でぜひ行っておきたいこと、それは「領域ごとの年間指導計画」を作成することです。時系列や教科書の学習材の順序によるのではなく、三領域それぞれの計画です。この過程で「本校の生徒にどのようなことを力を育てるか」というカリキュラム作成上の課題が明確になります。また、領域ごとの学習の系統性が明らかになると同時に、学習指導要領で示されている内容（指導事項）の過不足も明らかになります。教科書ではおおむね指導事項が偏りなく指導できるように配列されていますが、はじめに考えた「本校の生徒の実態」とは、どこかで隔たりがあるのではないのでしょうか。

この手順を行うことにより、それぞれの学校にふさわしい年間指導計画作りが行えるといえます。

## 2 「聞く」から「聴く」へ

いくつかの教室を見ていて気になるのは、「聞く」力を具体的にどう考えているか、授業者である先生の明確な姿勢が見えないことです。それは、指導計画等で示される評価規準を見るとよく分かります。

例えば、討論ゲームの指導計画では「相手にわかりやすく話したり、自分の考えとの違いを意識して聞くことができる。」というような評価規準が多く、多くの教室で示されます。この規準をもとに評価することは可能でしょうか？ また、「適正な音量や速度で話すことができる」という規準が知識・理解の評価規準として示されますが、この場合の「適正な音量」とはどのような音量か、学習者と授業者で共通の理解が得られたうえで評価が行われているのでしょうか？

このような問題に対する回答の一つとして、神奈川県愛川町立愛川中学校 中村慎輔先生の「ナンバリング・ラベリングの手法を取り入れた実践」を通して、聞き取る力を高めるための学習のあり方を考えてみましょう。

注（この実践記録は平成十五年十一月七日に神

奈川県藤沢市立藤ヶ岡中学校で開催された  
第四十六回関東地区中学校国語教育研究協

議会で提案されたものです。）

中村先生の主張は、「聞く力を育成するために、『論理的に聞き取るためのメモの取り方を身につけて身につけさせたい。それがコミュニケーション能力の育成につながるのではないか。』というものです。具体的には「ナンバリング・ラベリング」という手法を用いた授業の実践記録です。

この提案から学ぶべきことは、「聞く」学習の中で、確かに聞き取ったといえる実感のもてる学習を展開したことにあります。そして、「聞く」力に身についた生徒たちは、その力をもとに「話す」際にも、聞き手を意識した論理的でわかりやすい話し方をするようになります。「聴く」ことの価値すなわち自分から積極的に耳を傾けることの価値がわかり、「聞き手にとってわかりやすく話すこと」が、自分の考えや思いを正しく伝えるうえで有効なのだ」ということに思い当たります。

一年生の「討論ゲームをしよう」の学習の中で行った提案ですが、二年生のポスターセッションや三年生のパネルディスカッションでも用いることのできる考え方です。

もう一つ、「読む」領域の学習の中で「聞く」力を育てる取り組みを紹介します。二年生の「ジーンズ」をもとに、いくつかの詩を取り上げて「朗読発表会」を行う中で、「聞く」ことの意味に気づかせたいという提案です。

授業を行ったのは横浜市立中川西中学校 竹下恭

子先生、学習した生徒は藤沢市立湘洋中学校二年生。前の例と同じ関東地区国語教育研究協議会で行われた授業です。

授業は「詩のボクシング」の手法を取り入れて、対抗するグループの優劣を決めるジャッジまで行う形で展開されました。授業全体の学習のプロセスに、「聞く」ことを意識した仕掛けがされています。ジャッジカードと名づけた評価票の中の評価の観点に「選んだ詩についてのコメントの内容が伝わりましたか」という項目があることに注目しましょう。コメントとは、発表するグループが、あらかじめ「こんな思いを込めて朗読します」という形で聞き手であるジャッジ（朗読するグループ以外の生徒）に、自分たちの選んだ詩について、伝えたいこと・この詩のよさ・作者の訴えなどをまとめて知らせておくものです。ジャッジはこのコメントの内容を聞き取ることが、判定するうえでの大事なポイントであることを意識します。

群読があったり、動作化があったりと発表はバラエティーに富んでいて、グループの発表が終わるたびに大きな拍手が起きました。そして、ジャッジではコメントの内容が朗読に反映されているかどうかを判断基準として全体の評価に大きな意味をもっていたように思えます。

詩を読む学習は、本来個人的な活動であることはいうまでもありません。この竹下先生の提案でも、そのことをふまえ、そのうえで協働する学びがもつ価値を取り入れることを意図していると述

べています。その具体的な学習のプロセスで意図的に「聴く」ことを取り入れた結果、学習全体が活性化したと見ることができます。

### 3 「聞く」ことから始まる学び

ここにあげた二つの例は、いずれも「聞く」との意味や価値に気づかせ、文字通り「聴く」とへと学習者の意識を向かわせ深めることを目指しています。「しっかりと聞くことの大事さ」を直接的に説明したり押しつけたたりするのではなく、学びを通して実感させて、結果として「きく」意識を育てる授業になっています。

このような積み重ねをすることによって、「聞く」力が育つという見通しがもてます。次の段階として別の学習場面でその育った力を検証します。その振り返りと積み重ねがカリキュラム評価であり、それがまさに「本校の生徒の実態に即したカリキュラム作成」につながります。

ある学校の二年生の「平家物語」の授業の中で、次のようなことばに出会って驚きました。

「平家物語」の本文を読んで、内容の理解に基づいて朗読（群読）を発表し合うという授業です。生徒が書いた「朗読を通して人に伝えたいこと」の中に、

「聴く人に昔のふいふいんきを伝える」とあったことです。

この《ふいいんき》と書いた生徒は、中位以上の学力を発揮しているということです。《雰囲気》という単語を理解語彙としてもっていて、さらに文脈の中で使うこともできています。「朗読を通して聴く人に昔の雰囲気を伝える」ことが、学習の目標として妥当かどうか、そのこと自体にも疑問がありますが、《ふいいんき》と書いた生徒がいて、グループでそのことを確かめたうえで提出したのでしょうから、この《ふいいんき》については、少なくとも数人の生徒には違和感がなかったと見ることがができます。(詳細に聞き取りした結果ではないことをお詫びします。)

「生徒は時にこういう思い違いをするもの。」かもしれない。

そういう現実から、二つめの提案です。「聞き取りテスト」をすることです。尾木和英先生(東京女子体育大学)がその効用を説いておられます。

文章表現力を高めることを目指す大学の講義で、継続的に「聞き取りテスト」を行うことにより、学生の国語力が向上したというお話です。

具体的には、多くの教室で行われている漢字テスト(書き取りテスト)の代わりに、または、その一部として「聞き取ったことを正しく書く」テストを行うことです。それも、継続することが大事です。

例えば、植物の名称を系統的に聞き取らせて書かせてはどうでしょうか。生徒たちの日常から季節感が薄れています。

桜やチューリップは知っていても、七草を知らない生徒が増えています。また、例えば『われもこう』って何? と聞かれて植物の名前だと答えられる生徒は、どれくらいいるでしょうか? 聞き取ってひらがなで正しく書けるでしょうか?

「聞き取りテスト」を意図的・継続的に行っている先生方から共通して聞かれるのは、「授業を聞く姿勢が改善された」というお声です。

#### 4 おわりに

「きく」力が身についたかどうか、それだけを取り上げて検証することは確かに難しいことです。だからこそ「きく」ことの価値が実感できる学習を創っていきたいものです。そして「話すこと・聞くこと」が一体となった学びの中で、繰り返し確かめましょう。そういうカリキュラムを作り実行するという明確な見通しの中でこそ「ことばの力」は育つのだと考えています。

※1 「ことばが育つ学びのプラン」二〇〇三年 三省堂

〔みうら しゅういち〕神奈川県横浜市立原中学校長。生徒が主役である教室づくりが課題だと考えています。学ぶ意欲を育てる学校づくりを目指しています。

## 実践アイデア 1

# 小学校の現場から

大木 圭

千葉大学教育学部附属小学校

### 実践1 お話を聞こう

○活動の概要 百円ショップなどにも売っている「お話のCD」を流すだけの活動である。給食の準備をする時間でも行うことができる。

○活動の実際 一年生で実践した。給食の準備のため騒がしかった教室は、CDが流れた途端に静まり返り、子どもたちの目は輝いた。どれも「はだかの王様」「おもすびころりん」など誰もが知っているはずのお話であるが、多くの子どもが引き込まれていた。また、同じお話を流しても、飽きるどころか、その語り口などをまねする子どもも出始めるほどであった。

○その他 CD以上に効果的なのは、やはり、教師自身が覚えた昔話などを直接話してやることであろう。学習材としては、東京子ども図書館の「おはなしのろうそく」がおすすめです。

### 実践2 ニュースキャスターになろう

○活動の概要 朝礼など、まとまったお話を聞いた後に行う活動である。テレビに見立てた段ボール箱の中で、聞いた話を報道記者として伝える。あらかじめ、これを知らせておく。

○活動の実際 五年生で実施した。「二人の若者が、商売をしようと町に出たが、ある店で水が売られているのを見て、一人は「この町は、水でさえも買わなければならぬような所なのか。こんな所では、商売はできない」と考えて去っていく。ところが、もう一人は「こは水でさえも売れるのか。だったら、何でも売れるぞ」と考えて、商売を始め、大成功を収める」という話である。子どもたちは競って報道し合った。「物事は前向きに捉えて行動しよう」というお話でした」と報道記者よろしく上手に伝える児童が出ると、拍手が起こった。

☆聞くことの学びが成立するために

聞く活動は、受動的な活動のように見えて、実はそうではない。聞いたことばをもとに、お話の世界を想像したり、要点をまとめたりする能動的な活動である。裏を返せば、そうした活動が保障される場をつくるのが、聞くことの学びをより豊かにすると考えている。

〔おおき きよし〕昨春秋、自分たちで作ったプラネタリウムの中で、星座にまつわる神話を下級生に語るという単元を実施しました。「語りの授業」に興味のある方は、「こ」報を！



# 中学校の現場から①

佐藤 佐敏

新潟大学教育人間科学部附属新潟中学校

「聞くこと」の学びとして、考えられる方法は、大きく分けて二つある。

一 カウンセリングの「傾聴訓練」のように反復練習する学び

二 「雑誌制作」「ニュース番組制作」といった大きな総合単元の文脈の中で、必然的にインタビュー活動を組織するような学び

「基礎・基本の定着」といったことが声高に叫ばれると、一つの反復練習の必要を感じる。そして、そういった学習もときに必要である。

例えば、一年生の四月から国語の授業の最初の十分間、「傾聴訓練」の時間にあてるといった方法である。一対一の対話形態で、三分間×二セット、相手を交替して行うのである。

しかし、こういった訓練や練習において、生徒の学習意欲を引き出しながら行うことは難しい。確かな学力は、生徒の学ぶ意欲に基づいた「学びの文脈に位置づいた」活動の中でこそ身につくものである。

この「意欲に基づいた学びの文脈」の中で「基礎に降りる学び」として「聞くこと」を位置づけていくことが、国語科では求められている。

そういった意味において、着目すべきは、総合単元である。具体的には、「雑誌制作」「ニュース番組制作」などが、それにあたる。これら総合単元では、生徒の学習意欲は、すこぶる高い。しかし、ともすると、「活動はあったが、学びのない状態」にもなりかねない。

この総合単元には、「読む活動」「書く活動」「話す・聞く活動」…すべての要素が入っているわけであるが、その中で、「どんな力をつけるのか」を教師が明確にもっていないなければならない。「聞くこと」の学びとして、どんな力を身につけて行うのかを意識して総合単元の授業構想を行うことが望まれる。ちなみに、組織するインタビュー活動では、「相手の立場を尊重しながら的確に聞き取る」ための、問いかけの技能を身につけさせたい。

私は、「聞くこと」の確かな学力を身につけるために、これら総合単元に活路を見いだしている。

「さとう さとし」 昨年度は、「ニュース番組制作」「ラジオCM制作」「プロポータル・コンペティション（企画会議）」といった、「話すこと・聞くこと」に焦点つけた総合単元の開発を行い、実践研究をした。

### 実践アイデア 3

## 中学校の現場から ②

宮本由里子

東京都品川区立八潮中学校

「連続朗読劇場」と名づけた読み聞かせをここ何年か続けている。授業開始からおよそ十分間。ときに生徒の熱い要望を無視できずにもう少し…。これで一学期に単行本一冊はいける。

国語の時間が減らされ、どこを探しても余裕などなくなった今、「こんなことに時間を割くのはやめようか、無駄な時間ではないか」とも考えたが、生徒の声を聞けばそれもできない。中学生に読み聞かせするなんて…もっと若いころにはそう考えていた。しかし目の前の、「本なんてキラリ」「漫画ならね」と言っているたくさんの生徒にどうか本のおもしろさをわかってほしい。その一心で始めたこの「連続朗読劇場」は、読書を日常の中に取り込み、本好きを増やしてくれただけにとどまらず、さまざまな恩恵を私の教室にもたらしてくれた。

この時間には特に評価もない。本の世界にひたつてくれるだけでいい。ただ、心の中に情景や登場人物の様子などが浮かんでくるようにひたすら耳を澄まし、心を開いて聞きひたつてほしい。願いを込めて真剣に読む。それに応えて生徒はただ一心に聞く。聞くということは受身だから楽だろうと考える方もあろうが、十分間

もじつと聞き続けることはかなりハードな頭脳労働である。読み終わると、生徒からふーっとため息が出ることもある。なかなか現実に戻ってこないような生徒もいる。読み手の私が涙してしまふこともある。それでも時間が来ればさつさと気持ちを切り替えて「さ、教科書を開いて！」と次へ進む。それだけだ。それを毎時間続けるのだ。

最近のことだ。ある生徒が「聞いているときだけじゃなくて、文章読んでて頭にいろいろ浮かぶようになったのは朗読劇場のおかげです」と書いてきてくれた。聞く力がつき、さらに他の力も伸びてきたという実感があつたのだろう。「心が落ち着く」「何よりも好きな時間」「国語の時間が待ち遠しい」と言われる幸せを独り占めしてはもつたない。あなたも始めてみませんか。ただの読み聞かせだが、ただの読み聞かせではない「連続朗読劇場」を。

〔みやもと ゆりこ〕この一年、都の教育研究員として対話の授業の可能性を研究しました。朗読劇場では朗読にふさわしい作品探しに苦勞しています。自作自演しようかな。

## 実践アイデア4

# 高等学校の現場から

富谷利光

千葉県立千葉大宮高等学校

ここ数年来、「聞く力がすべての基本だ」と考えて、実践を試みている。

単純で効果があるのは「聴写」だ。文章を読み上げて、書き取らせる学習である。子どもたちは大変集中する。読み上げる文章もさまざまに工夫できる。詩や啓発的な文章は、内容面でも意義深い学習になる。

次に、メモの指導である。メモの技術は重要だが、あまり教えられていない。箇条書きの練習から始めて、今は重要度に応じた階層化の指導を中心に行っている。大切なことは繰り返しである。修学旅行の連絡や、ニュース、毎時冒頭のスピーチなど、聞き取りメモの活動を繰り返し行っている。

また、新聞の投書を教師が読み上げてメモをさせ、それに対して意見を書く活動を継続的に行ったことがある。その発展形として、インタビューの記事を読み上げ、メモをして意見を書く活動も行った。話しことばなので、生徒は聞きやすいようだった。

効果を上げるには、正確に聞き取れたかどうかをその都度フィードバックすることだ。聴写やメモは正解例を板書したり、印刷して配ったりする。特にメモは過不足を確認させる。あまり重要でないことを長々とメモし、重要なこと

が欠けてしまうことが多い。

しかし、技術だけに偏った指導では不十分である。

茨木のり子の詩に次の一節がある。

だが

どうして言葉たり得よう

他のものを じっと

受けとめる力がなければ

〔「聴く力」より〕

技術だけではなく、相手を尊重して受容する力、心構えが必要だ。

スピーチ（シヨウ・アンド・テル）の後にコメントを書かせているが、とてもいい。思い出の手紙を持ってきた生徒に対して、クラスメートの暴れん坊が、「話を聞いているだけで手紙の大事さと中学校の思い出がなんとなく伝わった。これからも手紙大事にしてください。」と書いた。お互いに大切なものを持つてくるという場の設定が功を奏しているのだろう。今後も続けたい。

（とみや としみつ）千葉県立千葉大宮高等学校教諭。『学級経営と授業で使えるカウンセリング』（会沢信彦・植草伸之編、ぎょうせい）に、カウンセリングを生かした国語の授業実践を執筆。

# 「書くこと」の テスト問題

—どんな学力を見るのか—



小田 和也

熊本県甲佐町立甲佐中学校

平成十五年春実施の全国公立高校入試では、79%の都道府県で課題作文が出题されています。タイプに分けると、テーマ指定型45%、ディベート型15%、図・グラフ読み取り型20%、文章読み取り型20%となっています。(平成十六年度用「国語の新研究」新学社による)

私は、どんな学力をみるのかという視点から、「書くこと」のテスト問題を考え、実践してみました。まず、学力を次の三層でとらえることとします。

A 基礎学力 (読み・書き・計算などの基礎的な知識・技能：B、Cの基盤となる学力)

B 各教科の基礎・基本 (学習指導要領の指導事項)

C 生きる力 (問題解決の資質・能力、豊かな人間性、健康や体力)

この三層に対応する問題を示します。ご覧いただいで、ご批判をお願いします。

## 1 基礎学力をみる問題

次の文章を、解答欄に、正しい原稿用紙の使い方にしたがって写せ。

【メロスは激怒した。必ず、かの邪知暴虐の王を除かなければならぬと決意した。】

○視写の問題です。

丁寧に正しく書く

基礎的な技能をみます。学習全体の

基礎であり、注意

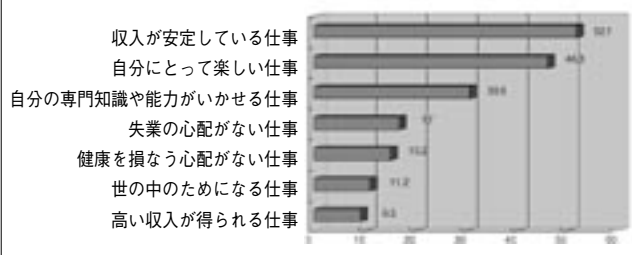
力もみられるので、私はよく

出題しています。

## 2 各教科の基礎・基本(学習指導要領の指導事項)をみる問題

次に示すのは、「国民生活に関する世論調査」(平成十四年六月実施・内閣府)の結果の一部である。Aさんのグループでは、この資料をもとに、ニュースショー形式で発表をすることになった。次に示すのは、そのシナリオの一部である。後の問いに答えよ。

どのような仕事が理想的だと思うか



時間	構成	項目	発表内容
1分	起	1 スタート ○あいさつ ○出演者の紹介 ○話題の導入と提示	【キャスター】 こんにちは。ニュースの時間です。今日のキャスターは○○、リポーターは△△さん、コメンテーターは××さんと●●さんでお送りします。では、「国民生活に関する世論調査」についての話題です。「(①)」という質問への結果についてです。では、リポーターの△△さん、どうぞ。
5分	結 ↓ 承	2 リポート 結論・要点 ↓ 詳しい内容	【リポーター】 はい。この質問に対して、みなさんならどう答えますか。一番多かった回答は、(②)で、全体の(③)%の人がそう答えています。[一部略]
3分	転	3 コメント	【キャスター】 なるほど、コメンテーターの××さん、この結果をみてどうですか？ 【××コメンテーター】 「失業の心配がない仕事」、「健康を損なう心配がない仕事」という意見が思ったより多いなと思いました。私は、もっと積極的な理由で仕事を選びたいと思います。たとえば、海外での医療ボランティアなど「世の中のためになる仕事」について充実した生活を送りたいと思います。 【キャスター】 なるほど、では、△△さんはどうですか？ 【●●コメンテーター】 解答欄に書く。

(1) (①) に入る最も適当なことを  
書け。  
(2) (②) に入る最も適当なことばと  
(③) に入る数字を書け。

(3) あなたが●●コメンテーターだとしたら、どんなコメントを発言するか。下線部分の××コメンテーターの言い回しにならって、自分の予想と調査結果を比べながら、自分の意見を解答欄のコメントメモに書け。

○題材「ニュース番組をつくらう」の授業を受けて、「B書くこと」指導事項ウ・エ(第二学年及び第三学年)の定着を見ます。

### 3 生きる力(問題解決の資質・能力)をみる問題

次に示す新聞記事(をもとに再構成したもの)を読んで問いに答えよ。

(1)この文章に内容を端的に表す「見出し」をつけよ。

(2)下線部「体力低下の背景には、……必要がある」とあるが、子供の体力を向上させるための対策として、あなたが町長さんなら、どういうことをするか。根拠を示しながら、意見を述べよ。

○「B書くこと」指導事項イ・エ・オ(第二学年及び第三学年)をもとに、総合的な学習につながる思考力・判断力、問題解決能力をみようとします。

中央教育審議会は「子どもの体力向上のための総合的な方策について」と題する答申をまとめた。

答申では、子どもの体力低下の原因の一つを「室内で過ごす時間が増加し、外遊びが減ったため」と分析。テレビゲームなどで遊んで自宅にこもりがちな子どもを何とか外で遊ばせようと、いろいろな工夫が盛り込まれた。

文科省の調査によると、子どもの体力・運動能力は、例えば13歳女子の持久走(1000メートル)で、1985年の267.11秒から2000年には292.77秒と、15年間で25秒以上遅くなるなど、85年ごろをピークに、どの学年も低下している。一方、30年前に比べ、11歳男子の身長が4.5センチ伸びるなど、体格は年々向上している。

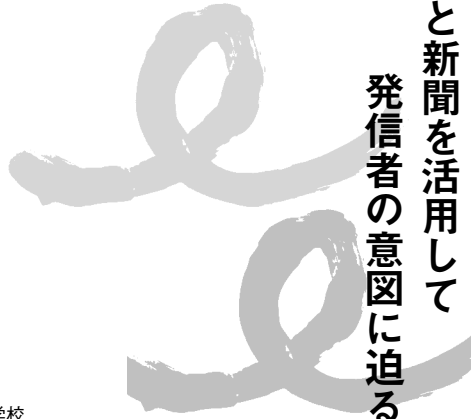
答申は、「(体力を)低下傾向から上昇傾向に転じ、これまでの(調査の)最高値を超える」という目標を初めて設定。体力低下の背景には、少子化で遊び仲間が減ったことや、子どもが外で遊ばなくなったことがあるとして、子どもに体を動かす楽しさを感じさせる必要があると提言している。

〔おだ かずや〕熊本県甲佐町立甲佐中学校教諭。生徒に学力をつけるためのカリキュラム作りや、国語科の効果的なＴＴ、少人数指導、習熟の程度に応じた指導の創意工夫に努めているところだ。

# メディアからの 情報を活用した授業

## テレビと新聞を活用して

### 発信者の意図に迫る



今井 靖

群馬大学教育学部附属中学校

#### 1 国語科とメディア教育の接点

現代は、さまざまなマスメディアから多くの情報を受け取っている。そして、情報を利用して日々の生活を送っている。しかし、多くの情報を受信はしているけれども、事実のすべてを知っているわけではない。発信者側の立場や考え方、意図、ひいては、個人的な好みによって事実の切り口が異なってくる。また、発信者が何を重要視するかによって、情報の発信の仕方も異なってくる。

そこで、ニュース等を分析し、発信者側の情報の切り口や意図を探る授業を展開することによって、情報に流されたり、偏った判断に陥ったりせず、むしろ、偏った判断に陥つたりせず、むしろ、情報を批判的（クリティカル）に判断できる能力を伸ばせると考えた。

#### 2 メディアの特徴について

本校で使用している教科書教材文には、情報の伝え方（テレビのニュースの報道の仕方）として、二種類の手法があると述べられている。

① 全体的・概略的な捉え方でデータを伝える手法。（鳥瞰図ちようかんずのように報道する）

〔特徴〕

- ・長所として、問題を社会的に解決すべきものと捉えやすくなる。
- ・短所として、数値化され、抽象化されてしまうために、人々の喜怒哀楽を理解しにくい。

② 部分的・具体的な捉え方でエピソードを伝える手法。（人々の生きた姿を報道する）

〔特徴〕

- ・長所として、見る人に、ときには深い同情や感動を引き起こすことができる。

・短所として、「映像」を求めたあまりに個人的に解決すべき問題である印象を生み出してしまふ。

そして、テレビというメディアでは、①の手法が得意であると述べている。その理由として、テレビは、「映像」を伴っているためであるという。

#### 3 学習活動の実際

まず始めは、教科書の内容を検証する形で、実際のニュース番組を使った授業を行った。取り上げた番組は、

・テレビ朝日「熱闘甲子園」

・NHK「ニュース10」  
・TBS「ニュース23」

等である。

「熱闘甲子園」は、人物のエピソードを全面に出している番組として生徒に認識させやすいため、非常に効果的であった。

また、「ニュース10」「ニュース23」は、同一テーマにおけるテレビ局ごとの切り口の違いや構成の比較をさせるために有効であった。

(1) テレビ番組を分析する。  
①一つのニュースについて、報道の構成を分析する。

②登場した人の立場を確認し、「なぜ、これらの人がインタビュウを受けていたのか」を話し合う。

③登場した人の順番について、「なぜ、この順番で報道したのか」を話し合う。

④この報道を通して、「テレビ局は何を伝えたかったのか」を話し合う。

⑤「伝えられていない事実はないか」を話し合う。

⑥異なるテレビ局のニュース報道を比較・分析し、わかったことを話し合う。

〔自己評価〕として

集意図を探ることができたか。

②テレビ報道における事実の切り取り方を理解することができたか。

次に、文字情報のメディアの代表として、新聞を使った授業も展開した。

(2)新聞を比較・分析する。

①同日の第一面に掲載されている数社の記事を比べてみよう。

②同一テーマの数社の記事を比べてみよう。(見出し・リード文の表現。記載されているデータや数値。使われている写真。情報発信元。等)

③同一新聞社の異版(異なる地域の新聞)を比べてみよう。

④同一新聞の同一テーマについて、異なる紙面(一面・経済・社会・地域)を比べてみよう。

⑤同一テーマにおける新聞と雑誌の違いを比べてみよう。

〔自己評価〕として

①紙面(記事)の構成や表現方法に注意し、編集意図を探ることができたか。

②新聞記事における事実の切り取り方やデータの扱い方を理解することができたか。

#### 4 実践から見えてきたもの

一連のメディア教育単元として、数時間の授業を展開してきたが、メディア教育の授業で最も大変なことは、素材を集めることである。学習材としてふさわしいテレビ番組や新聞記事。生徒が関心を持つてくれるようなテーマなどとさまざまな要素が満たされたものを集めるのは非常にづらいのが現実である。今回は、「米、十年ぶりに不作」というテーマで授業を展開したが、生徒にとっては、喜んで取り組むほどのものではなかった。しかし、授業を進めていくうちに、メディアからの情報を分析することのおもしろみを感じてくれていたようだった。

いずれにしても、今回のような実践を続けていくことで、情報を批判的(クリティカル)に判断できる能力は伸ばせるものであると感じている。メディアを活用した授業は、今後ますます必要となってくるはずである。

〔いまい やすし〕群馬大学教育学部附属  
中学校教諭。音声言語教育やメディア教育の実践に励んでいる。また現在は、古典学習にも注目し、古典を楽しく学習できる学習材を探究・開発している。

# 「個人記録簿」の 作成と活用



## 1 「個人記録簿」について

個に応じた、きめ細かな指導をするためには、まず、生徒の実態を十分把握しなければならぬ。これまで、項目を吟味しながら、個人の記録をし、年間を通して指導に役立ててきた。

しかし、ここ数年の私のテーマは、単なる評価や個人記録で終わらせない、いわば処方箋(治療的指導)付き個人カルテの作成と活用である。学習事項の習得の有無、程度および欠陥を発見し記録し、個別に処方し、生徒との往復(フィードバック)の記録をするのだ。目標を達成できていない生徒に、何を、どのように補充し、治療を施していくかの基本データ作成である。また、教師用の多量のデータ帳も必要だが、実際に生徒との往復で生かせるのは、絶えず書き込みの可能なカード形式の記録簿である。これは、生徒の学習意欲を高めるための個人内評価の取り組みにも有効である。生徒が、学習課程を習得したかどうかを、自ら、チェックすることこそ重要だからである。

つまり、「成長し続ける二種類の記録簿の作成と活用」という、きわめて時間

と手間のかかる地味な、しかし生徒の実態を把握し、指導上有効と思われるテーマを掲げ、取り組んでいるのである。三年間を継続指導できたらと願うのだが。

## 2 「個人記録簿」作成の実際

実際に記録簿を作成するにあたってどの項目を取り上げるかは、非常に重要なことである。まず、記録がしやすく比較的、指導の効果も現れやすいので言語事項を中心に取り上げることとした。

### 【項目一覧】

- ①漢字(小学校一年生～六年生)  
読み・書き
- ②作文(誤字・脱字の抜き出し、文末  
尾の一貫性、段落、句読点、  
原稿用紙の使い方)
- ③文法(文法の段階毎の小テスト)
- ④マスターシート(形成評価用)
- ⑤定期テスト観点別記録
- ⑥定期テスト誤答抜き出し
- ⑦その他・小テストの記録
- ⑧生徒による振り返り

玉城 栄子

沖縄県那覇市立石嶺中学校



### 3 「個人記録簿」の効果的な活用

- ①教師による一斉指導（全体の傾向と再テストなど全体記録からの指導）
- ②個人面談（個人記録からの指導）
- ③相互評価（同じ誤答の生徒を教師がグループ分け）
- ④個人評価（フィードバック）
- ⑤個人の振り返りの記録

#### ○ 治療的指導について

・教師の一方的治療にとどまらず、個人に気づかせ学習への動機づけとつなげ、学習意欲を高めるように再テストなど工夫する。

### 4 まとめ

もちろん多忙な中で、いつでも誰でもできる実践でないことは十分理解しているつもりである。しかし、この期間の試行錯誤が今後さらに精選された項目や指導方法へとつながればと模索しているところである。

授業そのものの研究、生徒の言語活動は当然十分なされるべきである。これまでも話し合い活動（デイベート）、読

書活動（ブックトーク）など研究してきたが、そのうえで今回、特に個人記録にこだわってみたのである。評価のためにせわしなく、本来の意味で生徒を見ていないという批判も多くあるが、私の記録簿に関しては、決してそれをしないことを前提にした。

個別指導については、当然放課後の時間のみでなく、授業でも行われることになる。私は、年間を通して学習形態を大きく、一斉・グループ・相互・個人課題解決学習に分けてそれらを組み合わせ取り組んでいる。個人課題をこなしている間に教師による面談を取り入れていることが多い。授業では、決して生徒に空白の時間を与えないよう心がけている。まだまだ、試行錯誤で今回の掲載も恥じ入るばかりだが見守っていただきたい。

### 5 今年度（一年生）教科書の活用

本校は、平成十三年度国研九州地区大会会場でもあり、国語教育は充実しており教師、生徒の意識も高い。国語科の授業実践として作品を図書館前のピロティに常時掲示している。掲示板も屏風形式の大型のもので見ごたえもある。生徒も

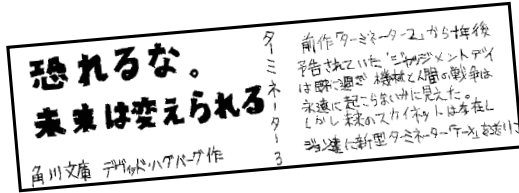
関心が高くよく眺めている。以下は、特に取り立てて授業を行ったものである。（ ）は、本校独自の取り組み。

- ①読書郵便（中学校文化連盟発表会出品・沖繩、那覇）
- ②文法（ことば遊びの例を作ろう）
- ③故事成語（四コマ漫画・解説付き）
- ④レポートを書こう（総合的な学習の時間との関連）
- ⑤「食感のオノマトペ」（インターネット上の料理をプリントアウト）
- ⑥詩（個人詩集の作成）
- ⑦自分史新聞（市販の新聞原稿を使用）

生徒がことばそのものに興味を持ち、いきいきと取り組んでいる姿を見ると教材のよさを実感させられる。言語活動の場面を多く設定でき、使用して二年めであるがこの教科書を教師自身も楽しんでいるところである。

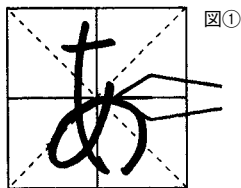
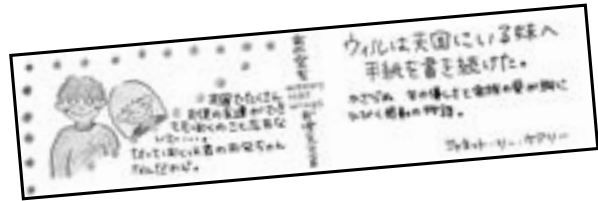
〔たまき えいこ〕 那覇市立石嶺中学校  
教諭。個に応じた、きめ細かな指導には、  
処方箋付きの個人カルテ作成と活用・個人  
評価が必要と考え、実践中。

# 国語教科書と 関連づけた 書写学習の 取り組み



日高 辰人

東京都杉並区立高南中学校



- 1 「書写の学び」の意義  
— 中学生の実態と課題
- 生徒の「文字を書く」実態
- ①速さ  
一点一画をおろそかにしない楷書でノートを書いたり、メモを取ったりしているので書く速さが遅く、文字を書くことで精いっぱいである。
- ②意欲  
板書事項が多かったり、資料を書き写すことが多かったりすると、書くことをおっくうがる。
- ③執筆法  
シャープペンシルの使用により、握るように持ったり、人差し指と中指で握るなどする生徒が多い。また、シャープペンシルを向こうに傾けて、自分の書いた文字を見ながら書く生徒が増えている

(写真①)。万年筆すらも真横に持つ生徒がいる(図①)。

○文字を書く楽しさ・大切さを発見するために

書くことによって思考は鍛えられる。パソコン全盛の時代だからこそ、キーボードをたたくのではなく、自分の手で書いて、思考を鍛え、指の感覚で漢字・語彙・語句を獲得することが大切である。

また、書いた文字は、一人一人の顔が違うように、個性があることを発見することも「自分の字」を育てていくうえで肝要である。

しかし、「書写」の配当時間は一年で約三十時間、二・三年では約十時間とされているが、現場ではなかなか実施できないのが実情である。

そこで「書写」の発想を変えることを提唱したい。手本の丸写しではなく、「書写の能力を生活に役立てる」(『学習指導要領』第3の2の3のア)ことを第一に考え、国語の授業を軸に学校内のさまざまな活動に「書写の学び」を位置づける。そうした活動をとおして、例えば、学習の記録であり、成長の証であるノートが「作ることが楽しい、自分の宝物だ」と

感じられるまでにしていけたらと願っている。

なお、執筆法の指導は日常的な取り組みが必要であるが、適宜使い捨て万年筆を利用して指導している。これは持つ角度に注意させたり、構える方向に注意させるのに効果的である。(以前の中学生は万年筆を大半持っていたが、現在の中学生で持っている者はごく少数である。)

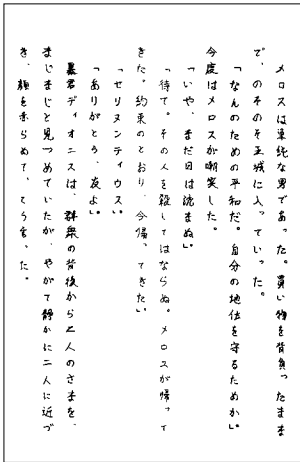
## 2 国語の学習の中で文字を育てる

### —二・三年の「書写」指導を中心に

二・三年の書写は、「整った字を速く書く」が中心となる。このことを、時間数が削減されたもとで、国語の学習や特活・総合的な学習の時間などとの関連を考えながら実践していきたい。

以下、筆者のこれまでの取り組みをもとに、いくつか提案する。

図②



図③



### ▽国語教科書の文学作品とのリンク

・「走れメロス」の気に入った部分を書いていねいに書く。(パソコンで本文を行書体で打ち出して、字形の参考にさせた。生徒は行書を書こうとかなり苦労していた。)(図②)

・短歌や詩などから、一つ選んで紹介し、掲示する。(図③)

・聴写をする。(二〇〇〜四〇〇字程度。説明的文章で行う場合もある。)

### ▽国語教科書の古典作品とのリンク

・「竹取物語」(一年)の冒頭部を細筆で書く。

・「平家物語」の冒頭や「徒然草」を視写する。

### ▽読書とのリンク

・読書終了後、気に入った文章を1〜2行、ノートに視写する。その際、5mm方眼ノートを使用し、1マスが四コマ(1

cm角)になるように使用させる。

・本の帯を作る。

### ▽特活や行事とのリンク

・「百人一首大会」に向けて、大きな読み札を作り、掲示する。

・「読書週間」「球技大会」「遠足」「美化週間」などのポスターを作る。

・修学旅行、社会科見学などの事前・事後学習のまとめを作る。

これらの活動に取り組み際に、「読みやすい文字」「整った文字」「速く書くこと」「全体のバランス」などのポイントを定め、事前に書写としての指導を行っておく。

また、こうした活動を年間指導計画の中に書写としてきちんと位置づけておくことが大事である。

さらに年間四〜五回、一回について1〜2時間をあてて、参考となる学習材を使った行書のための練習時間を設けておくことも大切である。

(ひだか たつひと) 杉並区立高南中学校。私立中学・高校の講師を経て昭和五九年公立中学校勤務。昭和六二年度東京都教育研究員・平成二年度東京都教育開発委員。

## 吉野弘「夕焼け」

山梨大学教授の須貝千里さんの模擬授業とその後の検討会に参加したことがある。学習材は、中学校の国語教科書にしばしば掲載されてきた、吉野弘の詩「夕焼け」。(鶴田清司・須貝千里「国語科教育法」での研究的模擬授業―文学教育と言語技術教育の相互乗り入れをめざして(その2)、『都留文科大研究紀要』二〇〇一年参照。以下、引用は、この論文による。)

満員電車で、へうつむいていた娘がへとしよりへに席をゆずる。へとしよりへは、へそさくさとへ座るが、へ礼も言わずにへ次の駅で降りる。娘は座る。へ別のとしよりへが娘の前に立つ。娘はまた席をゆずる。へとしよりへは、次の駅で礼を言つて降りる。娘は座る。さらに、第三のへとしよりへが娘の前に立つ。娘は、今度は席をゆずらない……。

可哀想に

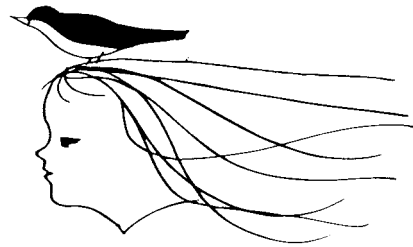
娘はうつむいて

そして今度は席を立たなかった。

次の駅も

次の駅も

## 「語り手」の概念の導入



宮川 健郎

明星大学

下唇をキュッと噛んで  
身体をこわばらせて―。  
僕は電車を降りた。  
固くなってうつむいて  
娘はどこまで行つたらう  
やさしい心の持ち主は  
いつでもどこでも  
われにもあらず受難者となる。  
何故つて  
やさしい心の持ち主は  
他人のつらさを自分のつらさのように  
感じるから。  
やさしい心に責められながら  
娘はどこまでゆけるだろう。  
下唇を噛んで  
つらい気持ちで  
美しい夕焼けも見ないで。

(「夕焼け」後半)

模擬授業は、三十分という設定で行われた。須貝千里さんは、生徒役になった大学生十四名から事前によせられた作品の感想のなかで、なぜ三度めに娘は席をゆずらなかったのかということが疑問として多く出されていたことの紹介からはじめた。どうして三度めに娘は席をゆずらなかったのか……。須貝さんが用意し

た発問は三つ。

1 三度めに娘は席をゆずらなかつたが、一度めと二度めが逆だったらどうか。——娘は、一度めには礼を言われない。二度めには言われる。もし、これが逆だったら、二度めに礼を言われなかつたことに腹を立てて、三度めにはゆずらなかつたことになる。

2 二度めに席をゆずったとき、「しかし／又立って／席を／そのとしよりにゆずった。」と改行されているのは、なぜか。——一行で書かれた場合と比較する。

3 娘が常にうつむいているのは、なぜか。

須貝さんは、次のようにコメントして、三〇分の授業をおえた。

〈先生は、それは（娘が三度めに席をゆずらなかつたのは——宮川註）含羞、恥ずかしさだと思います。（中略）さっきのみんなの意見につけ加えて検討してみてください。しかし、もう時間がありません。今日は、三回目に娘が席を譲らなかつた理由について考えてきましたが、さらに、その理由について想像している人は誰だろうか。娘はそんなことを自覚し

ているのかな。これが次の問題です。これも考えてみて下さい。〉

## 語り手の力

模擬授業後の検討会で、私は、須貝さんが第二の発問をした場面を問題にした。授業のなかで、生徒役の学生は、こうたえている。

〈浜手 四つにわかれていると（四行に改行されていると——宮川註）時間が長い。周りの視線とか、席を譲るかどうか考えながら、時間が経っていることを示しているように思う。〉

T 時間の経過が感じられる。ここが大切ですね。読む時間もかかるし、それから娘が何か考えているようだということがわかるね。〉

詩のなかの（しかし／又立って／席を／そのとしよりにゆずった。）と改行して書かれていることの理由がたずねられているのに、右のやりとりでは、まわりの視線を気にしながら何か考えているらしい娘のようすを読もうとしている。しかし、この四行は、考えている娘によりそって見ている語り手がこのように表現

したものだ。須貝さんは、授業のおしまいで、〈その理由について想像している人は誰だろうか。〉と新たな投げかけをして、ようやく詩の語り手のことにふれるけれど、（しかし／又立って／席を／そのとしよりにゆずった。）の四行から、このように語った語り手のことを一挙に問題にすることだできてきたはずだ。

「夕焼け」の語り手は、〈僕〉と名のる。その〈僕〉は、（いつものことだが／電車は満員だった。／そして／いつものことだが／若者と娘が腰をおろし／としよりが立っていた。）と語り出す。（いつものことだが）の繰り返しからは、こうした世間のことにつきあつてきた人物、だから、もう若いとはいえない、というふうに語り手の像を肉付けしていくヒントが得られる。須貝千里さんは、検討会のなかで、こんなことを問題にする授業も構想していたとして、次のように言った。〈満員電車なのに「僕」は「娘」を見られるのか、「僕」はどこにいるのか、「娘」は目の前に人がいるのに夕焼けを見られるのか、「うつむいていた」視線が上がるのときに見えないといけないので、後を振り向くということはおかしい。では、

満員電車の中の登場人物の位置関係はどうなっているのか。その場の位置関係と「語り手」の心の中の光景との違い。

たしかに、〈下唇を噛んで／つらい気持ちで／美しい夕焼けも見えないで〉というの、電車を降りてしまった〈僕〉の想像であって、実際はどうかかわらない。このことにかぎらず、「夕焼け」には、語り手の力がすみずみまで行きわたって、登場人物のことは、むしろ読みにくい。この詩を読むことは、娘を〈やさしい心の持ち主〉とした語り手の見方や考え方を読むことにほかならないのだ。

## どのように書かれているか

「夕焼け」には、語り手の力が行きわたって、登場人物を読みにくいにもかかわらず、娘の気持ちを読もうとする授業が数多く行われてきた。それは、どうしてか。早くから西郷竹彦が「視点」ということともからめて「話者」（つまり語り手）ということを行い、あるとき注目された「分析批評」の考え方において「話者」が重要視されたのに、「語り手」の概念は、国語科の授業にまだ十分に引

きこまれていないからではないのか。もつと言えば、詩や物語や説明的文章を「読むこと」が、いまだに何が書かれているか（内容や主題）を読むことだと考えられていて、どのように書かれているか（表現や構造）を読むことに目がむいていないからではないか。作品の表現や構造に目がむかなければ、語り手は問題化されない。だが、どのように書かれているかを読むことが重要である。作品の語られ方、語りの構造を見出すことは、最近、「メディア・リテラシー」ということばで言われるようになった情報批判力の形成にもつながる。語りの構造をつかまえることができれば、それを「書くこと」のスキルの獲得に転移させることもできるだろう。

### 「つり橋わたれ」

### 「注目の多い料理店」

「夕焼け」には語り手の力がすみずみまで行きわたっているとしたが、物語にも、そういう語り手の存在を感じることがある。たとえば、小学三年生の学習材としてよく知られるようになった長崎源之助

の「つり橋わたれ」。

おかあさんが病気になったので、トッコは、いなかのおばあちゃんにあずけられる。おばあちゃん、トッコを山の子どもたちに引き合わせるが、トッコは、東京の自慢ばかりしてしまい、山の子たちにそっぽをむかれる。山の子たちは、トッコに、しぶきをあげて、ごうごうと流れる谷川にかかった、つり橋がわたれたら仲間にしてやると言う。

〈はしはせまいくせに、ずいぶんながくて、人があるくと、よくゆれます。おまけに、いまにもふじずるがきれそうなほど、ぎゅつ、ぎゅつと、きしむのです。〉

「つり橋わたれ」の語り手は、「夕焼け」の語り手が〈僕〉と名のつたように名をのらず、だれなのかわからないのだけれど、〈はしはせまいくせに〉とか、〈おまけに、……きしむのです。〉という口ぶりからは、山の村にやってきた、トッコにずいぶん同情的だとわかる。語り手は、トッコが、ふしぎな体験をくぐりぬけるなかで、つり橋をわたり、山の子たちの仲間に入るまでを、同情をもって語っていく。

私たちは、語り手に案内されて作品世

界を経験する。宮沢賢治「注文の多い料理店」の語り手は、(二人の若い紳士)によりそって語る。だから、読者も、紳士たちによりそって読んでいくことになる。

宮沢賢治が『注文の多い料理店』(一九二四年)を自費出版のようなかたちでつくった際の広告ちらしには、作品「注文の多い料理店」について、(都会文明と放恣な階級とに対する止むに止まらない反感です。)と記されている。紳士たちは批判されるべき者であり、作品を読めば、彼らの猟があそびでしかないこと、命を即座に金銭に換算するような精神の持ち主であることが露骨なくはいはつきりと書かれているのに、特に子ども読者は、紳士たちを突き放し、批判的に見るのがむずかしい。それは、語り手にみちびかれて、紳士たちに自分をかさねて読んでいくからではないか。

## 作者と語り手

そして、語り手は、作者ではない。実生活を生きる作者が中年男だとしても、彼の作品を小学生の男の子に語らせるこ

とも、若い女性に語らせることもできる。作者は、作品に固有の語り手をつぎつぎと乗りかえていくことができるのだ。

椋鳩十「大造爺さんと雁」の「まへがき」は、(知りあひの狩人にさそはれて、私は猪狩に出かけました。)と書き出されるが、(私)という語り手を作者の椋鳩十と短絡させる必要はない。椋は、西郷竹彦との対談(「大造じいさんとガン」の周辺)、『国語の手帖』一九八七年一月)のなかで、大造爺さんのモデルはいない、残雪も創造したキャラクターだと述べている。それなら、(私)も作中人物だと考えるべきだろう。(「夕焼け」の(僕)も吉野弘と考える必要はない。)(「まへがき」で、(私)は、大造爺さんの語った話を土台として書いていくこととわかる。おそらくは大造爺さんが「わたし」とか「おれは」と一人称で語った話を下じきにして、三人称に置きかえているから、語り手は、その大造爺さんの行動によりそい、心情にふみこみながら語っていくことになる。ところが、作中、そうした語り方とはちがう箇所があらわれる。雫におそわれた、おとりの雁をたすけようとして、残雪が登場する場面。

(残雪です。

大造爺さんは、ぐつと銃を肩にあてて、残雪をねらひました。が、何と思つたか再び銃をおろしてしまひました。)

この(何と思つたか)は、異質な語り方だ。それまでとちがって、語り手は、大造爺さんの心情に知らんふりをするように見える。だから、このとき、どうして大造爺さんが銃をおろしたのかは「なぜ」として作品にのこってしまう。この「なぜ」の答えをもとめて、読みつけていくと、やがて、大造爺さんの(おーい。雁の英雄よ。お前みたいならぶつを、おれは、卑怯なやり方でやつ、けたかあないぞ。)ということばにぶつか。これが「なぜ」の「答え」ではないか。そして、「なぜ」と「答え」の対応のなかで作品の主題のありかが示唆される……。主題もまた、語りの構造をとおして、うかびあがってくるものなのだ。

〔みやかわ たけお〕明星大学人文学部教授。日本児童文学専攻。児童文学作品の学習教材やその授業についても発言してきた。著書に『現代児童文学の語るもの』(NHKブックス)など。

## キーワードで読む国語教育

# \* 人間力の育成 \* 思考力の育成 \* 聞くことの指導

尾木 和英

東京女子体育大学

## 人間力の育成

いま国語教育に求められるもの

学校の指導改善に関し、学校外からも多くの貴重な提言がなされるようになってきた。例えば、平成十五年四月に公表された人間力戦略研究会報告書「若者に夢と目標を抱かせ意欲を高める」信頼と連携の社会システム」もその一つである。

この研究会では、教育関係、経済・産業分野、労働・雇用分野の有識者によって委員会が構成され、内閣府を担当部局として協議が進み、「人間力」という用語を中心に据えた政策提言がなされた。

報告書では、人間力を「社会を構成し運営するとともに、自立した一人の人間として力強く生きていくための総合的な能力」と定義し、その構成要素として知的能力的要素としての「論理的思考力」「想像力」、社会・対人関係的要素としての「コミュニケーションスキル」などに着目している。国語教育としては、ここにとらえられている思考力の育成、コミュニケーション能力の育成に強い関心を向けることが求められよう。

## 思考力の育成

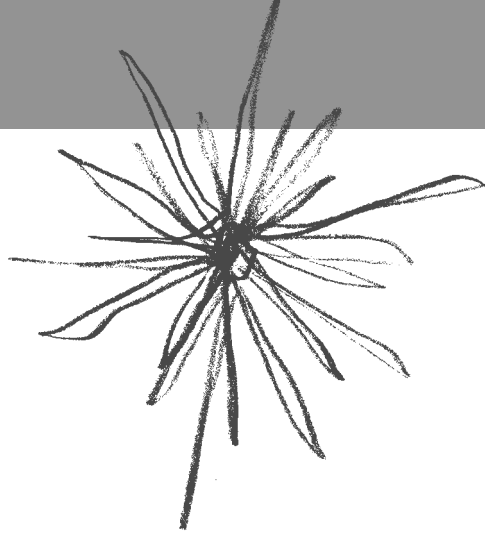
求められる指導のねらいの焦点化

中学校国語科の目標には、適切に表現し正確に理解する力の育成、伝え合う力を高めることと並んで、思考力を養うことが示されている。だが、その目標の現はそう容易なことではない。というのも、思考力とは人間の知的作用のすべてにわたり、分析的にとらえると、判断し批判する力、論理的にとらえ推理する力、情報を活用し解決を図る力など、様々な側面をもっているからである。

確かに毎時の国語の授業において、生徒は思考力を働かして学習に取り組んでいる。しかし、その活動において何がねらいとされ、指導の成果としてどのような思考の力が付いたのかという点に関しては、明確に意識して授業が組み立てられているとは限らない。

これまで繰り返し思考力育成の重要が言われ、多様な実践もなされている。今後は先導的な実践に学び、例えば①考えの中心を明確にして話すことに重点を置く発表、話し合いの活動、②話し手の意





図、根拠に焦点を合わせる聞く活動、③  
意見を効果的に伝える書くことの授業、  
④文と文、段落相互の関係に着目させる  
読むことの指導など、目標を明確にして  
の指導の工夫が求められる。

特に表現に関する指導においては、中  
学校学習指導要領解説（平成十一年）に  
示されているように、「個々の指導事項  
を学習者の思考の過程としてとらえる  
（四十二ページ）」ことが大切である。思  
考の過程ととらえることによって、その  
指導によってどのような思考力が養われ  
るかが見えてくる。成果の把握と今後の  
課題の確認のための評価の工夫も、そこ  
を基点とすることが求められる。

## 聞くことの指導

### よき聞き手が対話の基本

授業参観の折、教師の説明、指示が終  
わった途端勢いよく手を上げ、いま説明  
された内容そのものについて質問をする  
児童生徒を目にすることが多くなった。  
コミュニケーション能力育成のポイント  
として、聞くことの指導を取り上げるの  
はその故である。

もう一つ紹介したいのは、稿者の大学  
の授業において、聞くことの指導がうま  
くいくと学生の私語が半減し、効果的な  
対話が成立するという経験である。

聞くことの指導の意味を的確に示して  
いるのが、西尾実『国語教育学序説』（筑  
摩書房）の中の次の部分である。

「話し手と聞き手との距離が一定の範囲  
を越えて遠くなると、聞くことの責任感  
が薄くなり、聞き手というよりも傍観者  
になりやすい。（九十ページ）」

私語の生まれる土壌がここにある。相  
手への関心が薄く、傍観者、もっとひど  
い場合には完全な断絶の状態になってい  
ることがある。コミュニケーション能力  
の育成のためには、まず相手に関心を向  
け、耳をすませて聞く態度を育てること  
が大切である。何を言おうとしているの  
か、その中心、根拠を聞く。正しく聞き  
取る。その後に、自分がどう考えるか、  
自分の感想や意見の効果的な話し方につ  
いて考えさせる。そうした活動を中心に  
据える指導を工夫したい。

「おぎ かずあき」生徒の主体的な学習  
の成立に着目し、意欲を引き出す授業の  
実践事例の収集・分析を続けている。

いま、  
小学校では

# 多様な読みを引き出し 「伝え合う力」を高める 文学教材の授業

吉井美香  
福島県郡山市立橋小学校

■この子たちも勉強が嫌いになっ  
ていくのだろうか？

ある日、新聞を読んでいると「勉強嫌  
い七割越す」という見出しが目にとまっ  
た。文部科学省が、高校三年生を対象に  
実施した学力テストの記事である。各教  
科の弱点が浮き彫りにされたが、さら  
に目を引くのは、学習意欲アンケートの結  
果である。「勉強嫌い」が小六から大幅に  
増加し、高三では、実に七十三%にも上  
るといふ。

私は、三月まで小学六年生を担当して  
いたが、この子たちの「学び」もやがて  
衰弱・空洞化し、学習意欲が低下してい  
くのだとしたら悲しいことではないか。  
学習意欲を呼び起こすための外的動機  
づけが難しくなっている現代の子どもた  
ちにとっては、体験的な活動や発表、話

し合い・表現活動などを取り入れた協働  
的な学びと、スキル学習とのバランスが  
大切になってくる。内面から「学び」の  
おもしろさを引き出し、生涯学習の礎と  
なる自己教育力を培っていかなければな  
らない。では、小学校の国語の現場では、  
具体的にどんな授業を組み立てていけば  
いいのだろうか。

## 文学教材の授業を再考する

国語科では「話すこと・聞くこと」の  
一層の重視、「読むこと」の時数削減がな  
された。そのため、文学教材では、従来  
の詳細な読解を主とした指導法の見直し  
が必要となっているが、短時間で読む力  
をつけ、さらに集団で物語を読むことの  
楽しさを味わわせることはできないもの  
だろうか。場面ごとに内容を読み取り主

題をまとめる従来の授業スタイルではな  
く、集団で学び合うからこそ生まれてく  
る「読みの多様性」を引き出したいのだ。  
「ひびきあい、学び続ける子ども」を育  
てること。これが現在勤務する小学校の  
共同研究テーマである。まなび合い、つ  
たえ合い、みとめ合うことができる授業  
を国語科でも模索し、実践研究を進めて  
きた。文学教材での授業にこだわりをも  
って、「話すこと・聞くこと」の教材ではな  
くとも「伝え合う力」を育て、高めるこ  
とは可能なのではないかと考え、三つの  
段階に分けて授業を組み立てた。  
①正しく読み取るためのスキル（正確な  
音読、語句の意味、作品の構造、物語の  
しかけなど）を身につけ、学習者一人一  
人が作品と向き合う。  
②正しい読み取りをしたうえで、個々が  
「読みのこだわり」を持ち、読み深める。

③読み深めたことを、それぞれの観点から代表者が話し、パネルディスカッション形式で読んだことを交流し合う。

詳細はここでは割愛させていただくが、授業にかかわった児童、参観者、すべての者がこんな読みもあるのだと新たな発見をもち、自分だったらこう読むと、考えたくような授業をしたい。そう考え、「大造じいさんとガン」「きつねの窓」「海の命」といった教材で試みてきた。

すでに五年生時に、環境を題材にした説明文の単元で、ディベート形式の話し合いを学んできた。学級会でも身近な話題で討論やパネルディスカッションをし、意見の交流を楽しんできた。本実践は、これらことばで伝え合う能力を育む授業を、文学教材で応用できないかという思案の末、生まれてきた授業である。

読んで感想をもつことは一人でもできる。それを複数で交流し合ったときに出る発見、感動は学級という集団だからこそ生まれるものだ。そしてここで大切なのは個人の感想をその子の「読みのこだわり」として拾い上げ、他の子と突き合わせて構造化し、授業を組み立てるという教師の支援と手だてである。同時

に必要なのは、読みの分岐点に気づき、子どもからそれを引き出せる教師の教材研究と発問づくりなのである。

その難しさを感じながらも、授業の中ではつとめるような子ども意見に出会えることがある。物語の構造を見据え、はつきりしたことばで表せた子ども意見に出会ったとき、そしてその意見を「おもしろい。そんなことに気づくなんてすごい」と認めている子どもらの姿を見たとき集団で読むことのおもしろさを感じずにはいられない。物語を読むことは本来楽しいものである。正しく読み取ったことをもとにさらに自分の「読み」を深め、自分の意見を他者に伝え、相手からも意見をもろうことは大いに価値がある。子どもたちがそう実感できるような授業をこれからもめざしていきたい。

### ■「学び」の楽しさ、 真の意欲を

冒頭の話に戻る。調査の対象となった高三の生徒達は、関心・意欲・態度を重視した「新しい学力観」のもと、小学一年生から学んできた世代であるらしい。それなのに「学ぶ意欲」の低下、「勉強嫌

い」が結果となって表れたこと。この事実は、小・中学校それぞれの現場で実際に子どもたちを教えてきた私達への責任となつてのしかかってくることを謙虚に受け止めたい。

学び続けようとする真の意欲というものは、基礎的な力を身につけ、それをもとにわかったとか、発見できたといった実感をもち、本当に「学び」が楽しいと感じられる知的好奇心から生まれるのではないだろうか、改めて思う。課題は多いが「ことば」と戯れ、新しい発見がある国語の授業を創造していきたい。

\*

「読みの交流会」で、真剣に仲間の意見に耳を傾け、考え、自分の意見を述べる姿を見せてくれた子どもたち…どうか、中学校、高校でも、学び続ける意欲を損なうことなく国語の授業を楽しんでほしいと願う。

「よしい みか」 福島県郡山市立橋小学校  
教諭。「子どもことばと文学の会」(事務局仙台)を基盤に国語の新しい授業を模索し、辞書を使った授業、文学教材の授業などの実践を行っている。

る。そして、さまざまな経験を経て自分のアイデンティティーを見つけていくというものである。

さらに、有色人種への差別や、民族間の葛藤、歴史的裁判、離婚や新しい家族、ホモセクシュアルの問題なども、小説、情報テキスト、歴史書などさまざまな形で読まれている。

クリティカル・リテラシーの教育実践では、ホームレス・貧困、戦争、暴力団・銃暴力、いじめ、民族問題、社会的階層・他者との共存、伝統的でない家族、病氣・死、ジェンダーなどの、さまざまな内容の本が扱われている。難しい問題ではあるが、実際に子どもたちが直面する問題であり、その問題をどのようにクリティカルに読み解いていくかが教えられなければならない。

教師はこの多様な本に対処させるため、早い段階で、ジャンルを教える。子どもは、様々なテーマの本が、さまざまなジャンルで著されていることを知り、適切に読んでいくための方法を学んでいくのである。筆者の主観では、アメリカ（特に都市部）の子どもたちは、日本の子どもよりも大きく深刻な社会的な問題に対処していかなければならず、あまり発達段階によって読むものを選ばれてはいないように感じられる。彼らは、多様化した社会の中で生きていくことを要求されるからである。あるいは、そのような社会に立ち向かっていくための練習を、読書の追体験や知識によって行っているようにもみえる。しかし、これらは、政治および経済の国際化から、日本にも遠くならず訪れる状況ではないだろうか考える。

#### 4. おわりに

以上本稿では、アメリカの言語教育における標準化と多様化を述べた後、読書指導の実際例に触れた。

筆者は、日本とアメリカの読書指導の違いに驚き、日本においてもアメリカ同様の指導がいいのか、疑問を持ってきた。どのような路線をとるかは常に慎重に考えるべきである。しかし、今回、創刊号～第4号の執筆者の論考を読み、この2つの方向性が、経済・軍事大国アメリカに特有のものではなくて、世界中に進行しつつある大きな傾向であることに思い至った。

多言語・多民族・多文化は、「以心伝心」「うてば響く」といった心地のよい環境ではない。常に説明し、熟慮を重ねて行動しなければならない。し

#### (2) 多声を生かした読書指導の方法

多様化した社会においては、さまざまなテキストをクリティカルに読むという方法を教えるということが重視される一方で、自分の読み方について自信をもって発言し、他者の声にも耳を傾けていく姿勢も重視される。CPS から生まれたリテラチャー・サークル(Literature Circles : LC)はその例である。

LCでは、教師がクラスで紹介した数種類の本のうち読みたい本1冊を子どもが決め、その本ごとに3～5人のグループをつくる。グループでは、子どもたちがそれぞれ担当の役割を決め、読む分量を決め、役割にのっとった方法で読んできて、後で話し合う。役割とは、例えば、読んで浮かんできた質問を提出するクエスショナー、本の中の話と現実にあったことを結んで話すコネクター、本を読んで得たイメージを絵にかいてみるイラストレーター、優れていると思った表現を取り出して発表するリテラリー・ルミナリーなどである。これらの役割読みをグループで出して共有することで、それぞれの読みを深めていく。一つの役割は一人ずつで受け持つので、子どもたちは自分の経験に基づいた自分なりの読み方を、グループの子どもたちと共有することが求められる。シカゴの多様化する現実にあった読み方を教えながら、その子の読み方を奨励し、その子の考え方を理解していこうとする、多声に耳を傾ける指導となっている。そのためLCの評価点の半分は、積極的に話し合いに参加し、自分の考えを話し相手の声も聞くというコミュニケーションについての点である。

かし、一方で、多言語・多民族・多文化を生かしていくことは、複雑だが骨太の社会を生み出すことにつながっていくであろう。この状況の中で、言語教育をどのように実行していくべきか。我々言語教師の課題は非常に重いと考えている。

[あだち さちこ] イリノイ大学シカゴ校客員研究員(山形大学講師)。専門:国語科教育。スペインの「アニマシオン」、シカゴの「リテラチャー・サークル」など、読書指導の方法を中心に研究を進めている。

## (2) 多様化

アメリカでは、近年、英語を母語としない国からの移民が急増してきた。その中で、統一言語としての英語をどのように教育していくかは大きな問題となっている。

移民の代表例は、ヒスパニック系と呼ばれるラテンアメリカからの移民である。母語がスペイン語で目標言語は英語であると考えれば、目標言語を日本語とする外国人対象の「日本語教育」と同じかとも思えるが、実情はそう単純ではない。例えば、CPSの中には、メキシコ移民が中心になって立ち上げたマグネットスクール（特定の教科・領域に重点を置き、通学区の制限を越えて出願できる学校）があり、完全なバイリンガル教育を目指している。一方で、二桁以上の国からの移民の子どもを抱える学校も少なくない。しかし、一般的には、スペイン語の特に文章言語における指導は、英語の授業では行われないので、多くの子どもたちは、スペイン語の文章力は発達しない。したがって、スペイン語は口頭言語、あるいはインフォーマルな言語として位置づけられてしまう。その一方で、母語は英語でありながらも、スペイン語教師を目指して学ぶ子どもたちもいる。このように、スペイン語との関係から英語教育をめぐる状況は実に多様である。このような状況は、英語を母語として英語教育を受ける子どもたちにも影響を与えずにはおかない。子どもたちは、これらの移民や移民の背景的文化を理解することが求められている。

アメリカの言語教育界と関連する学問領域では、

1990年代から2000年代に、これまでのリテラシーの概念を再考しようという動きが高まった。メディア・リテラシー、ビジュアル・リテラシー、ハイパー・テキスト、マルチ・リテラシーズ、クリティカル・リテラシー、バイ・リテラシー、クリティカル・メディア・リテラシーなどが、アメリカにおける主要な研究テーマとなってきた。

例えば、ハイパー・テキストは、最近のWebなどによく見られる現象で、あるテキストの一部をクリックすると、まったく別のテキストに飛ぶというような、多くのテキストの関連した状態をさす。文章を読むという現象自体は変わっていないが、書物というメディアによって守られていたテキストの一貫性や階層性、あるいは時系列性が、読者のランダムなアクセスによって変化する。このことは、テキストの多層性・多文化性に対処する形で読むことの教育をデザインしていく必要を示している。

クリティカル・リテラシーは、オーストラリアの機能文法や談話分析といった言語学研究成果を背景に生まれた。しかし、アメリカでは、むしろ民主主義の実現と強く結びつけて論じられるようになった。特に、現代社会におけるさまざまな問題や、マイノリティーの理解および、読むことによる人権の保護とアイデンティティーの確保の実践として、位置づけられるようになった。このため、多言語・多民族・多文化の教室で、どのように他者をどのように理解し、どのように自分の権利を守り、アイデンティティーを築いていくかが大きな研究課題となっている。

## 3. 二つの方向性をふまえた読書指導の実際

以上、二つの方向性を述べてきた。この方向性は、一見反対のベクトルであるように見えるが、実は、多言語・多民族・多文化という複雑化する社会の中で、どのようにして人々の権利を守り、共通言語としての英語教育を築いていくか、という同じ問題意識の上に立っている。そこで、ここでは、議論のレベルを、具体的な読書指導の実践にしてみたい。ただし、ここで挙げるのは、アメリカにおける指導の全てではない。読書指導に研究関心がある筆者が、上記の二つの方向性を特にあらわしている指導事例を、それも日本の読書指導にも意味がありそうな事例を、描き出そうとするものである。まずは、このような現状認識において、子どもは何を読むことが期待されているかという、「読む本」

について、さらに、どのように読むかという「読み方」についての問題を取り上げる。

### (1) 子どもが読む本

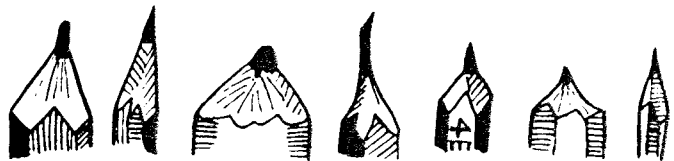
以上のような姿勢で選ぶ本は、多言語・多民族・多文化を踏まえて実に多様である。

まず、二言語で書かれた本が取り上げられる。特に歌や詩のようなジャンルにおいて、見開きの片方にスペイン語詩、もう一方に英語訳、あるいはその反対の組み合わせの絵本が多い。また、アフリカの詩集や漢字を説明した絵本など、外国語そのものに親しむ本も取り上げられている。

次に、最近の高い評価を得ている児童文学には、移民を扱ったものが多い。主人公は、親についてくる形で、アメリカという異文化の中に放り込まれ

# アメリカの言語教育における 二つの方向性と読書指導の実際

足立 幸子 イリノイ大学シカゴ校



## 1. はじめに

本稿を執筆するにあたって、本誌創刊号から第4号のこの欄を読み、非常に興味深く思った。なぜなら、執筆者がそれぞれの立場で執筆をしながら、アメリカにも通ずる言語教育の二つの方向性—統一化（標準化）と多様化—を描き出しているからである。

アメリカの大学に籍をおいている筆者にとって、

この二つの方向性は身近である。大学院生や大学研究者は、この方向性をアメリカの文脈で議論している。筆者自身も、今はこれが日本を含めた世界的な傾向であると思う。そこで、本稿では、アメリカの言語教育に二つの方向性がどのように現れているかを紹介しつつ、筆者が特に関心を寄せている読書指導の実際について述べることにする。

## 2. アメリカの言語教育における二つの方向性

### (1) 標準化（統一化）

1990年代の中ごろから、アメリカにおいては、標準化運動が盛んになった。これは、英語教育の統一的標準を求めようとするもので、国際読書学会（International Reading Association : IRA）と米国英語教師学会（National Council of Teachers of English : NCTE）が1996年にスタンダード（標準）を発表している。ただ、これは、日本における学習指導要領とは位置づけが異なる。なぜなら、アメリカのスタンダードは一種類ではないからだ。市のレベル、州のレベル、さらには、さまざまな教育団体レベルで、それぞれのスタンダードが存在する。例えば、シカゴ公立学校（Chicago Public Schools : CPS）では、シカゴ市、イリノイ州、IRA/NCTEな

どのスタンダードのうち、シカゴ市のスタンダードを採用している。

また、2002年には、No child left behind Act (NCLB) という法律が出された。「だれ一人として取り残される子どもがいないように」と、アメリカのすべての子どもたちの教育を保証しようとするものである。この中で、全ての学習を支えるための読書（reading）が非常に重視されるようになった。NCLB成立の背景には、メキシコなど、ラテンアメリカからの移民が増加し続けているということがある。この効果を計るためにNAEPという全国統一試験が行われるようになった。現在、アメリカの英語教育にかかわる教師・研究者が、NCLBに対応する教育のあり方を検討している。

# 本の紹介

糸井通浩



辻本雅史  
『「学び」の復権—模倣と習熟』  
角川書店  
1999・3刊

教育は何も学校だけでなされるものではないが、教育というと、学校教育がまず浮かぶ。学校を構成する先生と生徒とは、それぞれが教育する立場と学習する立場にあつて、教卓を境に両者は向き合う関係にあるのが、学校教育の構図である。先生の「教える」立場に対して、生徒は「学ぶ・習う」立場にある。しかし、現状の学校教育では、生徒の側にそういう自覚・姿勢が十分確立しないまま、希薄化しているのではないか。

本書の著者は、「教育」を丸投げされた、今日の学校教育の現状（学校社会化）に対して、「学ぶ」姿勢の復権を訴えている。ここで「復権」というのは、江戸時代から日本の教育の伝統には、「学び」という学習文化が育ってきていたことを前提とするからである。

向き合う関係は、「教える」立場に対して「教えられる」立場という関係になりやすい。教える側の論理

が教育の体制を支配する。まして、日本語には、「れるられる」「せる・させる」ということばがあつて、「学ぶ・習う」という主体的立場が確立する前に、「教えられる」「教えてもらう」「やらされる」「させられる」といった意識が介在しやすい。「学ぶ・習う」という自覚にまで雑音が入りこんでくるのである。

著者は教育史が専門、寺子屋（手習塾）や学問塾の教育など江戸時代の教育を研究している学者で、本書では特に貝原益軒の教育論と実践が『和俗童子訓』を中心に詳しく分析されている。明治以降の学校教育に至るまでのところが多くを占めているが、江戸に始まった、日本の近代教育の実態とその本質について、昔のことと感ぜさせない、新鮮な思いで読める解説になっている。その歴史的視座から現代の教育を見直しているのである。

明治以降の学校教育は、一斉授業

による教育である。そこへ近年、子ども一人一人の個性を育成するという教育理念の重要性が叫ばれ、学校教育現場でも、個人尊重教育が声高に唱えられている。著者はこの矛盾を鋭く指摘する。四十人を相手の一斉授業（教育）で個人尊重教育がどこまで可能かというわけである。もちろん現場のとまどいは隠せない。

学校現場では、敬語教育がなかなか根づかないといわれる。学校生活で先生たちは、生徒と向き合う関係でなく、むしろ横並びの関係でありたいと思っているからである。この思いこそ「学び」の学習文化を背景にして生まれてくる態度である。

これまでの学校教育は「教える」側の論理に立ったものであるが、「学ぶ」側の立場を基本とする視点で見直していかなければならないと著者は主張する。

「いといみちひろ」龍谷大学教授。  
文法・文章・談話を研究。

## 【実践研修】

- (3) 国語科学習指導法 (水曜日・全4回) 青山学院大学講師  
教師の学習指導法の基礎・基本を再認識し各自の国語科「授業力」の向上を図る。 花田 修一
- 1回 5月12日  
国語科は、何をめざして学習する教科なのか(目標論と内容論の観点から)
  - 2回 5月19日  
国語科は、何をどのように学習する教科なのか(計画論と方法論の観点から)
  - 3回 5月26日  
国語科は、何をどのように評価する教科なのか(方法論と評価論の観点から)
  - 4回 6月2日  
国語科での教師の支援・助言・板書等をどうすればよいか(指導技法の観点から)
- (注) 講義・演習・質疑・協議等を組み合わせ、自主的・生産的な講座としていきます。
- (4) 話すこと・聞くこと (水曜日・全4回) 前群馬大学教授  
「話すこと・聞くこと」の指導について、実践活動として具体的に研修する。 高橋 俊三
- 1回 6月9日  
音声言語の基本「声を届ける・声を受け止める」ことについて、実感し、実践する。
  - 2回 6月23日  
「話すこと」の基本理念を理解し、指導法を工夫する。
  - 3回 6月30日  
「聞くこと」指導の現状と課題を理解し、指導法を工夫する。
  - 4回 7月7日  
群読が必然的に呼び起こす「話し合い・聞き合い」活動を理解し、指導法を工夫する。
- (5) 書くこと (火曜日・全4回) 東京女子体育大学  
「書くこと」の学習指導と評価の在り方を、実践事例に基づいて具体的に研修する。 助教 田中 洋一
- 1回 6月22日  
「書くこと」の目標と指導事例(講義・演習・協議)
  - 2回 6月29日  
目的に応じた文章表現の指導(講義・演習・協議)
  - 3回 7月6日  
味わいのある文章表現の指導(講義・演習・協議)
  - 4回 7月13日  
「書くこと」の指導計画と指導展開(講義・演習・協議)
- (6) 読むこと (金曜日・全4回) 横浜国立大学  
国語科の授業で「読むこと」の授業について、再構築を図る。 教授 高木 展郎
- 1回 5月14日  
教室で「読む」ということの意味を考える(講義・討議)
  - 2回 5月21日  
「読むこと」の指導過程・これまでと、これから(講義・演習)
  - 3回 5月28日  
「読むこと」における指導と評価の一体化(講義・演習)
  - 4回 6月4日  
これからの国語の授業における「読むこと」の位置とありかた(講義・討議)
- (7) 言語事項 (金曜日・全4回) 言語教育文化研究所  
「言語事項」の学習指導と評価の在り方を、実践事例に基づいて具体的に研修する。 常任理事 篠田 信司
- 1回 6月11日  
「言語事項」の目標と指導事例の確認(講義・演習・討議)
  - 2回 6月18日  
漢字指導の実際(演習・協議・教材づくり)
  - 3回 6月25日  
語句・語彙指導の実際(演習・協議・教材づくり)
  - 4回 7月2日  
文法指導の実際(演習・協議・教材づくり)





# ILEC

言語教育文化研究所

Institute of  
Language,  
Education &  
Culture

言語文化教育研究所(略称:ILEC)は、ことばの教育、ことばの学びのこれからのあり方を「言語・教育・文化」という視点から広くとらえ、新しい言語教育(国語・英語を中心に)の創出をめざして設立された組織です。

活動内容としては、さまざまなセミナーの実施、先生向けの講座の開設、出版活動など幅広い展開をして参ります。

## 専門研修講座(国語)

### ご自分に投資してみませんか

新しい学習指導要領が本格実施されてから、3年目を迎えようとしています。国語科については、領域構成の改善とそれに伴う目標や内容の改善、授業時数の削減、目標に準拠した評価(絶対評価)の導入など、先生方にとっては戸惑うことの多い2年間ではなかったでしょうか。

一方、こうした戸惑いを解消すべき専門的な研修の機会と場が少なくなっているということも聞いております。

教育職員養成審議会の答申(平成9年)では、これからの教員に求められる資質能力として、「地球的視野に立って行動する資質能力」「変化の時代を生きる社会人に求められる資質能力」「教員の職務から必然的に求められる資質能力」などを掲げていますが、その前提として、「いつの時代にも求められる資質能力」(昭和62年)を挙げています。

その中で特に強調されていることは、「教育者としての使命感」「児童生徒に対する教育的愛情」「教科等に対する専門的知識」「広く豊かな教養」そしてこれらを基盤とした「実践的指導力」などです。

子供たちの瞳が輝く授業を創りだしたいというのは、教職にたずさわる全ての人々に共通の願いです。

日々の授業にお悩みの方、自分自身をさらにブラッシュアップしたいと考えている方、ぜひ、この研修会に参加してみませんか。

### I.目的

小・中学校で国語科担当の先生方のために専門的な研修の機会と場を提供し、我が国の言語教育及び言語文化の向上に資することを目的とします。

### 2.方針

- ア. 初任者をはじめ、すべての先生方を対象とします。
- イ. 国語科教育について、理論と実践両面から多彩な内容を用意し、参加する先生方のニーズに応えます。
- ウ. 一つの内容については、一人の講師による2～4回程度の研修を基本とします。
- エ. 研修会は毎週火曜日、水曜日、金曜日の午後6時30分から開始し、8時30分に終了します。
- オ. 参加費用は、2回型講座は、6,000円、4回型講座は12,000円(ともに資料代含む)となります。

### 3.内容(方法)・日程

講座番号	講座名/内容(方法)/日程	講師
<b>【理論研修】</b>		
(1)	国語科教育の基本 (火曜日・全2回) 国語科教育に期待されていることは何か、「指導と評価」の観点から研修する。 ●1回 5月11日 教育課程審議会答申及び学習指導要領の分析(講義・演習・討議)。 ●2回 5月18日 国語科における「指導と評価」の考え方と具体的な方法(講義・演習・討議)。	言語教育文化研究所 常任理事 篠田 信司
(2)	情報社会と国語科教育 (火曜日・全4回) 生徒の情報活用能力を育てる授業の基本から創意工夫の実際までを研修する。 ●1回 5月25日 情報活用能力の分析的な理解と指導の基本理解(講義、授業分析と協議) ●2回 6月1日 「話すこと・聞くこと」の指導と情報教育(演習、協議、講義) ●3回 6月8日 「書くこと」の指導と情報教育(学習材開発、指導法検討、講義) ●4回 6月15日 「読むこと」の指導と情報教育(教材研究、演習、指導法検討、講義)	東京女子体育大学理事/ 言語教育文化研究所 代表理事 尾木 和英

# 待望の朗読・読み聞かせの入門書

## 声を讀もう 声で描こう

朗読のための17の葉



定価 1,995円(税込) 152頁

聞くとは、話される声を読むこと。  
話すとは、声で書く〈描く〉こと。  
読むとは、文字の奥の声を聞くこと。  
書くとは、文字で話すこと。



朗読による言語活動の活性化の可能性と、文字を覚えることで失ってきた「声の力」を取り戻す手だてを、易しい理論と実践から楽しく学んでいきます。

### 【CD収録作品】

あめだま 伊豆の踊子 モチモチの木 走れメロス 山月記 やまなし 北越雪譜 地獄変 (以上 部分朗読)  
たけとの竹とんぼ 稲むらの火 難破船

### 【著者紹介】

西川小百合・松丸春生

朗読家。1994年に2人で《どこでも朗読館》を結成。100以上の演目をもって、全国各地の学校や公民館、ホールなどに出向き、朗読会や朗読教室を開いている。

■どこでも朗読館ホームページ <http://village.infoweb.ne.jp/~roudoku>

### 編集後記

●本誌『ことばの学び』も二回目の春を迎えました。本年度も、先生方とともに「新しいことばの学び」を探っていきたいと思えます。

●最近、本誌をお読みになったご感想をお寄せいただくことも多くなりました。先生方からのご意見を誌面に反映し、より充実した内容にしてまいります。

●本号は「聞くこと」の学びについて特集しました。いま、「聞くこと」の学びが、子どもたちのコミュニケーションを成立させるためにも必要であること、そして、教室での学びも可能であることが見えてきたように思います。

●ぜひ、ご意見、ご感想をお寄せください。『現代の国語』ホームページ（ことばと学びの宇宙）の「お問い合わせ」からメールでもお送りいただけます。

（太郎）

三省堂  
国語教育  
「ことばの学び」  
第5号

二〇〇四年六月一日発行

定価 一〇〇円（本体九六円）

編集・発行人 八幡 統厚

（発行所）株式会社 三省堂

〒一〇一八三三七

東京都千代田区三崎町二二二二一四

TEL 〇三(三三三〇)九四二七(編集)

振替 東京 〇〇一六〇一五―五四三〇〇

（印刷所）泰成印刷株式会社

東京都墨田区両国三一一一二

指導用教材

ピックアップカード

A2版 100枚

定価 16,800円(税込)

■学習材のイメージをひろげる写真や絵を、カラー(一部モノクロ)で豊富に用意しました。

学習材ビデオ

①〜⑥

各巻とも解説書・学習指導案付き

①②③④

定価 18,900円(税込)

⑤⑥

定価 21,000円(税込)

■鑑賞だけではなく、授業での活用を考えた、オリジナルビデオソフトです。

1 「自分を表現する

——スピーチとインタビュー」

2 「古文入門——言語編」

3 「この小さな地球の上で」

4 「平家のほろび——壇の浦の合戦」

5 「おくのほそ道」

6 「教盛の最期——平家物語より」

20分 40分 40分 40分 40分 20分



学習指導書

朗読CD／テープ 1・2・3

各学年 CD4枚または、テープ4本 解説書付

CD／テープとも各学年 定価 21,000円(税込)

■教科書の「本編」と「資料編」のすべての「読むこと」学習材が、正確かつ多彩な朗読で収録されています。

生徒用教材

ワークブック 1・2・3

各学年 B5判 112+20ページ

定価 580円(税込)

■教科書の全学習材を取りあげ、授業の展開に即して基礎・基本を学ぶ「必修学習ノート」です。

表現ワーク 1・2・3

各学年 B5判 80+8ページ 定価 420円(税込)

■教科書の「話すこと・聞くこと」「書くこと」領域のすべての学習材を取りあげるとともに、付録としてさまざまな言語活動のレッスンを収録しました。

漢字・語句学習ノート 1・2・3

各学年 B5判 各学年104〜96+8ページ

定価 420円(税込)

■新出漢字、新出音訓の完全マスターと語彙力をつけることを目指したドリル形式の学習ノートです。

文法学習ノート 全1冊

B5判 96+16ページ 定価 480円(税込)

■1年から3年までの、文法の窓・文法のまとめの学習に沿って活用できる、文法ワークブックです。

実力アップ問題集 完全準拠版 1・2・3

各学年 B5判 112+16ページ

定価 924円(税込)

■基礎から応用まで、確実に国語の学力を身につけるための、教科書完全準拠版総合問題集。全問題見開きの構成です。

教科書ガイド 1・2・3

各学年 B5判 192ページ

定価 1,890円(税込)

■学習材のねらいや学習のポイントがよくわかり、効果的な学習ができます。

ステップ式 常用漢字ドリル

B5判横 96ページ

定価 420円(税込)

■すべての常用漢字を、覚え、使うことよって、確実に取得していくことのできる積み上げ式のドリルです。

新学期、

ことばの学びをサポートします。





## 『現代の国語』ホームページ ことばと学びの宇宙

ご意見、ご感想はこちらへ  
[kokugo@sanseido-publ.co.jp](mailto:kokugo@sanseido-publ.co.jp)  
またはホームページ内お問い合わせフォームへ



## 国語の世界

ことばの学びをサポートします

### キーワード検索搭載！

キーワード検索システムにより知りたい情報をすばやく探し出すことができます。

- 『現代の国語』最新情報
- 日々の授業のサポート資料となる「学習指導計画作成のために」
- 多くの訪問者とともに話し合う「フリートーク(掲示板)」など

また、ことばの学びをサポートするだけでなく、ことばを「感じる」ようなコンテンツ(「ことばの季節」など)を豊富に用意しています。



## 教科書新時代

「対話する教科書」をめざして

現在、編集を進めている2006(平成18)年度版国語科教科書は、多くの先生方やご関係の方々とインタラクティブに交流しながらつくりあげていきたいと考えています。そのために教科書作りのプロセスを公開し、多くの方々から直接ご意見を伺えるような掲示板などもご用意しています。

### 辞書の世界

三省堂刊の辞書、事典を紹介し、「ことばの学び」との連携を探ります。

### 広がる学びの世界

総合的な学習の時間を考えます。

### メールマガジン

【KOKUGO MAIL-MAGAZINE】 (月1回・無料)  
「ことばと学びの宇宙」のトップページからご登録いただけます。

<http://tb.sanseido.co.jp/cyukoku/>

## 小学校国語の旅立ち

小学校国語のホームページをスタートします。  
小学生の「ことばの学び」を支援する情報を新しい感覚で、紹介していきます。

### 予定コンテンツ

- サポート書籍……………小学生向けの国語辞典や「ことばの学び」にいろいろな角度からスポットを当てている書籍を紹介します。
- 小学国語関連リンク集…小学生の「ことばの学び」に関連するホームページを集めます。

ほか

